

批評プラットフォーム〈クリティカル・プラトー〉

CRITICAL PLATEAU: A Platform for the Analysis of Media Texts and Audiovisual Images

石田 英敬*・西 兼志*・中路 武士**・谷島 貫太**

Hidetaka Ishida, Kenji Nishi, Takeshi Nakaji, Kanta Tanishima

本稿は、東京大学大学院情報学環・石田英敬研究室とNHK放送文化研究所、および株式会社日立システムアンドサービス（2010年10月1日より「株式会社日立ソリューションズ」）との共同研究の成果の一部を纏めたものである。

ひとつのリゾームを作り拡張しようとして、表層的地下茎によって他の多様体と連結しうる多様体のすべてを、われわれはプラトーと呼ぶ。¹

——ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ

1. はじめに（石田英敬）

1.1 知の再定義から新たな知の創出へ

現在、私たちは、「人間」と「知」と「大学」の「ゆらぎ」を経験している——。

二〇世紀から二一世紀にかけて、「人間」を基礎にして文明や文化が成立していた時代がひとつの区切りを迎えている。認識の歴史を考えてみれば、「人間」とは、たかだか二世紀ほど前、「近代」の始まりに発明された「モジュール」にすぎない。近代においては、「人間」を中心的な形象として「知」の「認識論的配置（エピステーメ）」が生み出されたが、その

知の配置が今日では崩れ、「人間」という認識ユニットは別の次元の浸食を受けて「波打ち際の砂の顔のように」消えつつあるといえる²。ミシェル・フーコーが述べたように、「言語」や「記号」、「情報」をめぐる認識論的次元の浮上を受けて、大きなパラダイム・シフトが起こっているのだ。

「知」とは「学問」を成立させる技術的・文化的システムのことであるが、このような状況のなかで、「人間」を基本にして成立して

*東京大学大学院情報学環 Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

**東京大学大学院学際情報学府博士課程 Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, the University of Tokyo

キーワード：テクノロジー、クリティーク、メディア、アーカイブ、タイムライン、トピックマップ

いた諸学問の自明性とその配置はゆらぎ、学問と学問の「間」あるいは「際」のところに (interdisciplinary)、現代的な「知」を編成する原理が移行しつつある。「情報」の問題とはまさしく、そこに生じつつある「知」の流動化、「人類文明」の「ゆらぎ」の問題そのものであり、「情報の知」の探究と創出が「学際的」に求められるのもそのためである。

そして、この「知」のゆらぎに対応するかたちで、「大学」が制度を組み替えようとしている。東京大学大学院情報学環の設立の背景には、「人間」の「能力」を構成する「学部」の「間」や「際」のところで (interfaculty)、大学の制度やシステムを問い直そうとする東京大学の主体的な組織戦略がある。「知」の交点である「情報」に関する学際的な運動体を通して、「知」を再定義していくこと——そのためには、高度に個別化し専門化し分散化し複雑化した「知」を編み直し、「知」を構造化し体系化し可視化するネットワークを組み立てていかなければならない³。

大学では、各々の研究者や教育者が多様なかたちでテーマに取り込んでおり、そこに統一的な方向性や目標、指針というものはもちろん決定されていない。しかしながら、「知」の再定義、「知」の配置の見直しと再整理を図ることで、新たな「知」の展開を導いていく必要が生じているのは確固とした事実である。これまでの学問の在り方を考え直し、新しい「知」の分

野を開拓していこうという傾向は、近年ますます盛んになっており、特に、情報学環のように、「情報技術 (IT)」あるいは「情報通信技術 (ICT)」を基盤にして、このような取り組みを行っていくことは、ある意味、オーソドックスな方向であると思われる。大学における「知」の「環境」の再構築が要請されているのだ。

情報学環・石田英敬研究室のように、哲学や現象学、記号論や批判理論など「人文学」の領域から情報社会や文化産業、メディア・テクノロジーの問題系にアプローチしてきた研究教育活動においても、多様な学問分野の研究者、研究機関、そして一般企業との協働作業 (コラボレーション) を通して、「知」の再定義、「知」の新たな展開——IT時代の「人文知」の構築——へ向けた試みを自らの問題として追求している。

具体的には、1) NHKアーカイブス・NHK放送文化研究所との共同研究プロジェクト、2) ベルナル・スティグレルが所長をつとめる仏ボンピドゥー・センターのリサーチ・イノベーション研究所 (IRI) との国際連携プロジェクト、3) 株式会社日立システムアンドサービス (2010年10月1日より株式会社日立ソリューションズ) との産学連携プロジェクトなどを推進している。それらの活動を通して、IT環境を基盤としながら、次第に研究の視点を押し広げ、新たな知の創出へ向けた大掛かりな研究協働へ発展することが見えてきている。

1.2 知のデジタル・シフト、新しいクリエイター

本稿の出発点として、「人文学」を基軸にして、「知」の「認識論的変容」の問題に関して、

「歴史的な見直し」の中から迫ってみたい。

人類の歴史、特に学問の歴史とは、なにより

もまず「文字」の発明を起源として、概して「文字」の「知」が人間の世界を整理してきた歴史にはかならない。「文字」とは、時間的に連続した経験や思考を、記号によって空間的に分節化して正確に加算的に書き込む技術であり、記憶の外在化を可能とするものである。それはまた、記号を分析する離散的な技術でもあり、文字の使用とその蓄積によって、書物と活字を基盤にした「知」が基礎づけられる。「人文知」とは、「文字」を中心にして組み立てられてきた、「人間の世界の総合の知」なのである。

ところが、二〇世紀以降は、「メディア」がその「文字の知」を大きく拡張してきたといえる。二〇世紀は、活字と書物をベースとした文字の知がゆらぎ、映画やレコードなどのアナログ記録技術、ラジオやテレビのようなマスメディアが発達し、IT革命にまで至った。二一世紀の現在は、デジタル記録技術が普及し、私たちの記憶のシステムの書き換えを推し進め、人間の意味環境に大転換をもたらしている。それに伴い、「人文知」は、社会の問いや技術の問いと結びつき、構造主義やポスト構造主義と呼ばれる現代思想や批判理論、文学や映画の批評、文化研究やメディア論、さらには情報科学や生命科学、認知科学との隣接領域にまで拡がって、大きな問題圏を作り上げてきたのである。私たちが経験してきている大掛かりな「知」の変容は、メディア・テクノロジーの変容とともに展開される全体的なプロセスとして捉え返されなければならない。

このような人文知の認識論的変容は、「人間」によって書かれ、「人間」の「認識」の基礎となっていた「文字」が、「メディア」

によって書かれる「テクノロジーの文字」へと転換されたことに起因している⁴。さらには今日、その「テクノロジーの文字」が「デジタルな文字」へと転換され、人間の知の配置や成立条件を根本的に書き換えている。このラディカルな知のパラダイム・シフト、「人間」と「知」の関係の「大転換」こそ、私たちが「知のデジタル・シフト」と呼ぶ問題系である⁵。

「知」の単位とは「文字」にほかならず、人間の「理性」は「文字」によって「批判」される——イマヌエル・カントは、「文字」を基礎にして「認識」を「確かなもの」にしていく作業を「クリティーク (critique/Kritik)」 = 「批判・批評」と呼んだのだ。カントによれば、「知」は「文字」によって「批判」されるが、このとき「批判」とは、「人間」の「知の可能性の条件」を問い、「人間に何が知りうるのか」を決定することであった⁶。

「クリティーク」は、その語源に、「篩にかける」、「識別する」、そして「決定する」という意味の「クリネイン (crinein)」をもち、そもそも私たちの認識の基盤そのものを原理的に問い、その認識を可能にする成立条件や限界を明らかにすることなのである。

一八世紀の「百科全書」の時代は、人間の書く「文字」そして「活字」による「認識」が「公共空間」を立ち上げ、「市民社会」を発達させ、近代の「産業社会」を生み出す「啓蒙」の時代であった⁷。ベルリン大学をはじめとした、近代的な意味での「大学」が生まれたのもこの時代以後である。

しかし、現在、私たちは、その「クリティーク」の成立条件そのものが大幅な書き換えを受

けている時代に生きている。「知のデジタル・シフト」の時代における「クリティーク」の問題とは、コンピュータの「計算テクノロジー」が、知覚や感覚そのものを生成する「文字」を書くようになったときに、「機械技術に支援された人間に何が知りうるか」、「その知の可能性の条件とは何か」、そして、「それをどのように決定することができるのか」ということにあるといえる。私たちは、これを「新しい知」の「要請」として受け止めている。「知」を新たに「批判」していくことが重要なのはそのためである。したがって、私たちが提起する「クリティーク」とは、カントのいう「純粹理性批判」⁸を新しいかたちで行っていくことであり、そうしなければ「知」の成立基盤が失われていくことになるだろう。近代学問の哲学的基礎に関わるこのような「問い」——それはまさに何世紀にもわたって形成されてきた「知」の基盤の地殻変動に触れる認識論的問題である

1.3 認知テクノロジー

本稿では、石田英敬研究室が、こうした問題系に対してどのように取り組んできたか、その経緯と実践を提示し、それを踏まえたくて考察を展開していく。「知のデジタル・シフト」の時代における「新しいクリティーク」に向けて、どのように持続的かつ協働的にアプローチしていくことができるだろうか——そのために必要不可欠な技術的基盤を、私たちは「認知テクノロジー (technologie cognitive)」と呼んでいる。

では、「認知テクノロジー」とは何だろうか。私たちが考える「認知テクノロジー」と

——は、今日、世界中の人文学者が直面している「ハード・プロブレム」であり、そのために国際的な連携が必要とされているのだ。

さらにいえば、私たちは、世界中で、過剰な情報やイメージを消化できない人間が、貧しい判断力や想像力しか手にできなくなった心的生活の悲惨に直面している。それは、文化産業やメディア市場（マーケティング）によって生み出された、「象徴的貧困 (misère symbolique)」(スティグマール)と呼ばれる「クリティークの危機 (la crise de la critique)」である⁹。「危機 (crisis)」もまた「クリネイン」をその語源にもち、その出発点においては、医学的に生死を分ける「決定的なとき」、「決定しなければならないとき」を指している。この「危機」を乗り越えるために、私たちは「新しいクリティーク」を作り出し、展開していくべき「決定的なとき」を迎えているのだ。

は、「新しい批判知」の「可能性の条件」となる「認識」の「デバイス (装置・道具)」である。それはつまり、「人間の経験を書き取り、認識し、その認識を伝達し、共有することを可能とするテクノロジー」である。たとえば、「文字」もその意味では「認知テクノロジー」のひとつであるといえる。しかし、現在では、人間が書く文字以上に、様々なメディア・テクノロジーの文字がそうした活動を技術的に支えている。

今日、様々な認知テクノロジーが、「知」の成立条件を書き換えつつある。しかも、「知識

社会」や「知識資本主義（認知資本主義）」と呼ばれるように、「知識」や「知」は、私たちの社会の生活原理そのものとなり、産業的な「資源」であるとさえいってよい。一九世紀の近代産業社会では、「情報が交換される場」を「公共空間」、「商品が交換される場」を「市場」と呼んできたが、資本主義が「ポスト・フォーディズム型」と称される段階に至った現代社会は、「情報」や「知識」が、そのまま「資源」であり、「財」であり、そして「価値」を生み出す時代になっている。

「知識」が共有されネットワーク化されるということと「価値」を生み出すということ、そしてそのとき「大学」における研究や教育のように「知識」を「確かなもの」にすることと「社会」を「持続可能なもの」にすることはダイレクトに結びつくことになると私たちは考えている。

無数の「情報」がインターネット上に氾濫し、様々な「知識」が拡散的に流通しているなかで、「知」を「確かなもの」にすることによって、「持続可能（サステナブル）」な社会を作り上げていく——「大学」はこのことに「責任」を負わなければならない。したがって、本稿の背景としてつねに問題となるのは、知識の情報インフラをどのように設計し、その環境や仕組みをどのようにデザインすべきかというテーマである。このテーマ設定のもとで、認知テクノロジーを基盤にした、研究と教育の編み直しが目指されなければならない。ゆえに、現代のIT環境における「知」の公共性の再定義へ向けて、「情報社会」における「大学」の「知」や「教育」の「再デザイン」の可

能性の一端を示すことが本稿の課題となる。

このような問題意識のもと、本稿は、この第1章（石田）に続く、5つの章から構成されている。第2章では、石田英敬研究室が制作している批評プラットフォーム「クリティカル・プラトール」を概観し、それを構成する批評モジュールや認知テクノロジーについて紹介する（石田・中路）。第3章では、「視聴覚アーカイブ技術」（NHKアーカイブス・NHK放送文化研究所）と「タイムライン」（仏ボンビドゥー・センターIRI）を使用した「研究事例」を報告する（西）。第4章では、「知のコンシェルジュ」（日立システムアンドサービス社）を活用した「研究事例」を報告する（中路）。第5章では、その「知のコンシェルジュ」を導入した「教育事例」を報告する（中路・谷島）。そして、第6章で、考察を纏めて、今後の展望を示すことにしたい（石田）。各章は、本章からの積み上げを前提として書かれてはいるものの、基本的には独立して読むことができるようになっている。それぞれモノグラフィとしてより大きな広がりをもつものであるが、本稿では、それらが集合として、どのような研究と教育のシステムを構築しようとしているのかを提示することにした。

なお、本稿は、本紀要の第70号（2006年）に掲載された、石田英敬・西兼志・高畑一路・阿部卓也・中路武士「テレビ分析の〈知恵の樹〉」の延長上に位置づけられるものである¹⁰。ここで紹介される研究教育事例は今後さらなる展開をもつものであり、本稿はそのための土台の一部として位置づけられるものである。

2. 批評プラットフォーム「クリティカル・プラトー」（石田英敬・中路武士）

2.1 「知恵の樹」から「批評の高原」へ

批評プラットフォーム「クリティカル・プラトー（CRITICAL PLATEAU）」とは、石田英敬研究室が推進している人文学プロジェクトである。「知のデジタル・シフト」に対応すべく、映像や音響の「メディア・テキスト」¹¹を中心にして、知識、思想、芸術などを対象にした「新たなクリティーク（批判＝批評）」のための「プラトー（高原・台地）」を、IT環境上にデザインし制作するプロジェクトである。

「クリティカル・プラトー」は、ハイパーメディア型理論百科事典「テレビ分析の〈知恵の樹〉」を基礎技術として発展させたものである。「テレビ分析の〈知恵の樹〉」とは、テレビのメディア・テキスト分析の知をITベースで構造化し、具体的なテレビ番組の分析実践を蓄積し、理論や概念の体系化を促進するために構想された「デジタル・エンサイクロペディア」である。その認識論的なベースは、「記号論」の新たな展開としての「テレビ記号論」および「情報記号論」であり、そこを原理論として、メディアの「技術論」と「社会論」とのインターフェイスが形成されている。「知恵の樹」は、メディア分析の知識を創出し可視化するための情報処理および意味解釈の協働システムであり、そこでは概念を共有するための知識ネットワークが構築され、集団的にメディアの実証研究を積み重ねていくことが目指されたのである。

私たちは、メディア・テキストを批判的に研究するにあたって、テレビ記号論や情報記号論

の知を構造化するために、その理論概念のコーパス化を行い、デジタル・エンサイクロペディアの項目体系とカテゴリー階層を分析し、マッピングする研究を行った。また、コンテンツ分析のために、視聴覚アーカイブの構築、データベースの制作、分析フレームの作成を行い、映像データ、概念データ、番組研究データを相互に結びつけ動作しうるシステムのプログラムの設計作業を試みた。そして、番組をジャンルごとにテーマ化して、それぞれに関するモノグラフィ研究を蓄積するとともに、分析作業のフローチャートと番組分析のテンプレートの作成、分析事例の体系化を図った。

この「テレビ分析の〈知恵の樹〉」のデザインとシステムは、3つの基本要素によって設計された。すなわちそれは、テレビ番組を取り巻く環境の根本的な変化を背景にして、

- 1) コンピュータのストレージにストックされる番組データベースを「土壌」に、
- 2) 個々の番組の具体的分析を認識の「根」に、
- 3) メディア・テキスト分析の理論概念や知識を「幹・枝葉」に、

それぞれ喩えて、メディア研究の「知の樹木」を「生育」させるというメタファーとして構想されたのである。ここで、

- 1) 「土壌」とは「視聴覚アーカイブの技術的・制度的体系」（映像コーパスの蓄積と検索）のモジュールを、
- 2) 「根」とは「映像インデキシング技術」

(メタデータ付与によるアノテーション)のモジュールを、

3) 「幹・枝葉」とは「ナレッジベース」(概念ネットワークの構造化と可視化)

のモジュールを、

それぞれ指し示している。

「知恵の樹」では、この3つのモジュールの管理は、市販の番組録画サーバを運用した研究室独自のアーカイブ構築、映像編集ソフトなどを活用した番組分析、オーサリングソフトを利用した概念ネットワークの作成など、基本的に「インディペンデント」なかたちで小規模に設計されていた(以上、この詳細に関しては、先述のように、「テレビ分析の〈知恵の樹〉」[本紀要・第70号所収]を参照のこと)。

それに対し、「クリティカル・プラトール」で

は、「知恵の樹」のシステムを継続させ発展させると同時に、この3つのモジュール開発において、

1) NHKアーカイブス・NHK放送文化研究所、

2) 仏ポンピドゥー・センターIRI、

3) 日立システムアンドサービス社、

など、他の組織との「研究コラボレーション・システム」の強化を行い、人文科学を専門とする単一機関では不可能な「領域横断的研究」を目指している。研究対象も、メディア・表象、思想・文化、芸術・技術など、多様な対象への拡張が図られている。そして、各モジュールの認知テクノロジーを転用した「クリティーク」を可能とするIT環境のデザイン設計が試みられている。

2.2 クリティカル・プラトールと認知テクノロジー

批評プラットフォーム「クリティカル・プラトール」を構成する複数の批評モジュールについてそれぞれの概要を示してみよう。この批評のための人文学プロジェクトは、3つの研究協働および認知テクノロジーによって組み立てられている(図1)。以下では、この3つの研究協働モジュールについて簡潔に紹介する。

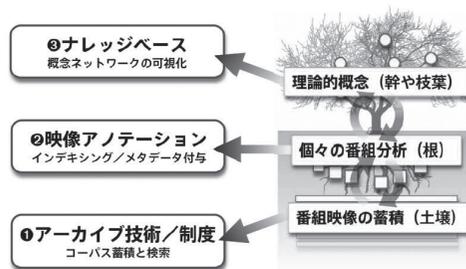


図1 クリティカル・プラトールのイメージ

2.2.1 NHKアーカイブス・NHK放送文化研究所との研究協働「テレビのアーカイブ学」

第一に、「視聴覚アーカイブ技術」(映像コーパスの蓄積と検索)のモジュールのベースとなるのが、大規模な映像メディアのアーカイブ施設や文化研究機関との研究協働体制の構築である。「クリティカル・プラトール」で

は、「知恵の樹」の研究環境を拡大しながら、NHKアーカイブスおよびNHK放送文化研究所と連携し、巨大なアーカイブ組織の制度的システムを背景とした「テレビのアーカイブ学」の理論パラダイムの創出に取り組んでいる。それ

は、「アーカイブ」に蓄積保存されたテレビ番組を「検索しながら視聴する」という「経験」それ自体を対象化し、さらには「アーカイブ」を通して「映像を視聴すること」それ自体をメタ的に問題化する作業にはかならない。

私たちの考えるところでは、デジタル・アーカイブという認知テクノロジーが拓くテレビ研究の新たな地平の可能性とは、番組の「主題論的研究」から「映像成層論的研究」への移行、「共時態的研究」と「通時態的研究」の相互的な協働であり¹²、それは、メディア・テキストの「映像」と「音響」が組み立てる「地層」を、テレビ視聴の文化的・集団的記憶のレベルから分析する「アーカイブ学」（フーコーがいうところの「知のアルケオロジ―」）の構想として提起されうるものである。

どのようなジャンルであれ、テレビ番組は、物いわぬ「素材」を「下地」として、関心を「主題化」し「言説化」することによって組み立てられる。そのとき映像は、ゲシュタルト心理学的に考えれば、「番組」の「図」と「地」として、あるいは現象学的にいえば、「番組」の「主題」と「地平」として「構成」される。ところが、その番組の「図（＝主題）」に対して、その「了解の地平」となる「地（＝地平）」の部分は注意の周縁部として記憶の中で焦点化されることは少ない。番組の事後的な「記述」においても周縁的な扱いを逃れない。しかし、この「背景」にして、「生」の了解の「地平」をなす部分の構成なしに、番組は成り立たない。じっさい、ひとびとの視聴経験の「感覚的」基層をなすのが、じつは「地」の部分であると考えるのがここでの仮説である。

視聴覚アーカイブ研究は、この世界の生の背景としての「地平」に注目することで、「番組」の了解を可能にする、人々の生活の「映像的生地」を分析する研究である。どのような「地」が「番組」の「主題」の「了解の地平」を形作ってきたのか。「番組」の主題を可能にした、「世界」の「了解の地平」とは何か。番組が主題として描き出す「生」の意味の「前提」とは何か。それは番組のどの部分に現れ、テレビの「時代」や「技術」によっていかに変化したのか。——テレビのアーカイブ学は、テレビという「社会的記憶装置」と人々の「生活世界」とが触れる境界の研究なのである。

現在、私たちは、人々の「生活世界」そのものを映像の「地」（記憶や物語のリザーブ）にもち、しかも、現実に生活している人々の「生活世界」を背景としつつ、「社会」——知識、政治、経済、歴史、医療、地方などの諸問題——を主題化し問題化する「契機」をもつジャンルとして「ドキュメンタリー」を対象領域に設定し、パイロット研究を実施している。アーカイブの構築によって、人々の生活の細部から、その「生地」と「テレビ映像」との関係性を分析する可能性が見えてきた。これは、テレビが「何に触れてきたか」、その「接触」を基底としてどのように社会を「媒介してきたか」といった「社会的記憶」の「成層」を辿る試みであり、「公共的記憶」としてのテレビの存在理由の考察へとつながるものである。このプロトタイプ研究から導き出される知見をもとに、番組の主題だけでなく、地平の「検索」を可能とする「データ構造」をもった「情報の組織化」を研究の俎上にのせることができる。

2.2.2 仏ポンピドゥー・センターIRIとの研究協働「タイムライン」

第二に、このメディア分析の方法論の技術的なベースとなるのが、「映像インデキシング技術」（メタデータ付与によるアノテーション）のモジュールである。これを可能とする認知テクノロジーが、仏ポンピドゥー・センターIRIが開発した映像分析・注解付与のための批判の道具「タイムライン（Lignes de temps）」である。

「タイムライン」とは、視聴覚イメージなどの「時間対象」¹³の分析のために、「映像の時間性」を「空間的な表象」へと変換することによって、映像の非線形的な読解とその可視化、再編集（映像の序列の組み換え）、アノテーションの付与、メタデータの共有などを可能にする「批判＝批評デバイス」である。ノンリニア映像編集ソフトを逆用するように、分析者は、映像の時間軸と並行した「デクパージュ」（時間のライン）を、分析の仮説と論点に応じて複数付け加え、そこにタグや注解を書き込むことができる。また、自動的・機械的にインデキシングされた映像ショット群の中から、デクパージュ上の任意の点を「セグメント」として指定し、そこに様々なかたちでアノテーションを付与することができる。さらに、「タイムライン」の中では、複数の分析者が作業することで、一つの時間対象に対する多様な視点から批評を重層的に書き込むことが想定されており、Web上に協働的な「クリティカル・スペース」を創出する可能性が提起されている¹⁴。

石田英敬研究室では、テレビ番組のアーカイブ学的分析にあたって、「タイムライン」を活

用して、集団的なメディア研究を行っている。プロジェクト・メンバーは、それぞれ研究対象とする番組の視聴覚情報を「タイムライン」に組み込み、その分析方法や理論知識を可視化し、共有し、批評し合う環境を構築している。

同時に、学際情報学府の授業「文化・人間情報学研究法」や、総合文化研究科の授業「情報記号分析」、教養学部後期課程の授業「言語情報文化論」で、この認知テクノロジーを利用し、視聴覚メディアを批判的に読解し理解するための教育活動に役立てている。

また、現在、私たちは、哲学者ベルナル・スティグレールが所長を務めるIRIと、遠隔通信技術をベースにして、定期的な国際共同研究セミナーを開いている。ポンピドゥー・センターIRIは、ロンドン大学ゴールドスミス校やバロセロナ現代文化センター（CCCB）と協働しながら「近代化プロジェクト」を推進している。この国際プロジェクトでは、世界各国の著名な研究者や芸術家（約100人）に「近代化」をテーマとしたインタビューを行い、その映像と音響を「タイムライン」に組み込み、Webベースで相互にアノテーションやタグ、コメントの付与を実施し、その議論を一般に公開することによって、「クリティカル・スペース」の創出が目指されている（日本では、蓮實重彦、藤幡正樹、石田英敬が参加している）。私たちは、「タイムライン」を用いたこのプロジェクトでモデルケースを提供し、国際的な批判知の研究環境のデザインを行っている（図2）。



図2 タイムライン（石田英敬インタビュー映像へのアノテーション）

2.2.3 日立システムアンドサービス社との研究協働「知のコンシェルジュ」

第三に、この批評プラットフォームのシステムのナレッジベースを構成するものが、メディア分析の知を体系化し、その概念をネットワーク化し、知識を可視化するためのモジュールである。視聴覚アーカイブや映像分析ツールは、それ自体では、個別的な知識を提示するにすぎず、そこで得られた知識を確かなものにするためには、それらを結びつけ関連づけていく必要がある。これを可能とする認知テクノロジーが、百科事典の知識体系の視覚的な探索、コンテンツサービスやナレッジマネジメントのために日立システムアンドサービス社が開発した「知のコンシェルジュ」である。情報学環で私たちは、IT時代に見合った「知の連環」を生み出すための「新しい百科全書」を構築するプロジェクトを展開しているが、デジタル化された知識の集積を体系的に結びつけたアーカイブの基盤形成のために、この認知テクノロジーを導入している。

「知のコンシェルジュ」とは、その名の示す通り、インターネット上に無限に広がる情報の

世界から「確かな知識」「価値のある知識」の世界へと使用者の知識探求に応じて視覚的に案内する「認識のツール」である。それは、『世界大百科事典』（平凡社）¹⁵など、「人文知」によって「体系化された知識」の関連や結合関係（目次や索引、様々な項目や図表への参照定義）の提示を可能にするとともに、「コンテンツ・プロフィール」を用いて、そのエンサイクロペディア的論理座標空間の中に、莫大なデジタル情報を位置づけ、知識と対応づけることを試みている¹⁶。つまり、人文学的アプローチによって組み立てられ体系化されてきた百科事典的な知識を、情報技術によってネットワーク化するという点において、人文知と情報知のインターフェイスの設計に資するものである。

さらに、「知のコンシェルジュ」は、その知識概念間のコンテクスチュアルな距離化と視覚化・可視化のために、「トピックマップ（Topic Maps）」——使用者がもつ概念体系に合わせて情報や知識を分類し整理し可視化するための国際規格で、知識と知識の間

の関係、情報リソースとの関係を、トピック (Topic)、関連 (Association)、出現 (Occurrence) という構成要素でモデル化してコンピュータ処理を可能とする、XMLによる「知識表現言語形式」¹⁷——をその要素技術として応用し、知識体系の中に構築された関連の検索を実現している。

この「知のコンシェルジェ」の最大の特徴は、体系化された人文知に基づく百科事典的方法論を背景としつつ、情報メディア技術によるその知識の分析によって、知の構造をネットワークとしてグラフィカルに可視化し、多面的

なアプローチのコンテクストにしたがった応答可能性の幅を拡大することにある。それは、メディアとしての百科事典の可能性を大きく押し広げるテクノロジーによって構築されており、一方で、リアルタイムに様々な項目や記述を加えていくことができ、他方で、これまで書かれてきた無数のテキスト、膨大なコーパスのデータベースと結びつき、その間に照応関係を築いていくことが可能になる。つまり、「知のコンシェルジェ」は、百科事典的な知の連環を、水平的にも垂直的にも拡張することができるのである (図3)。

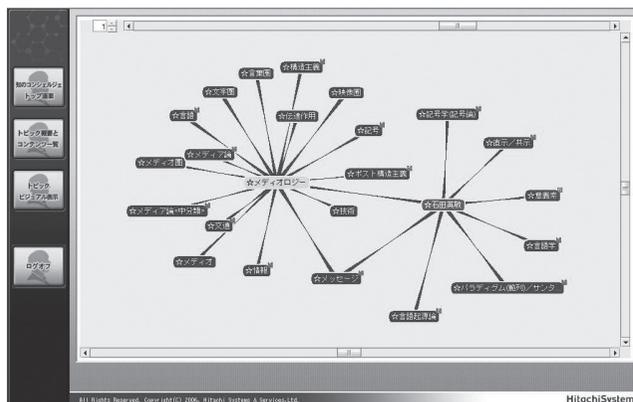


図3 「知のコンシェルジェ」のビジュアル構造
(中心トピック：「メディアロジー」「石田英敬」)

吉見俊哉は、西周によるエンサイクロペディアの最初の訳語「百学連環」から、「文化運動」および「知のネットワーク」としての近代日本の百科事典史を歴史的に振り返り、「メディア」や「メディアーション」としての「デジタル・エンサイクロペディア」や「デジタル・アーカイブ」を論じながら、Wikipediaなどの開放型のインターネット事典以後の「新百

学連環」を描き出し、情報学環の諸プロジェクトとともに、「知のコンシェルジェ」を、デジタル情報社会における「新百学連環」を萌芽的に示唆する横断的試みのひとつとして位置付けている¹⁸。

石田英敬研究室では、「クリティカル・プラトール」の知識マネージメント・システムとして、この「知のコンシェルジェ」を活用し、メディ

ア分析の知の構造化、概念のネットワーク化を行っている。現在、石田英敬の著作を構成する諸理論、テレビ記号論や情報記号論の諸知識をこの認知テクノロジーに組み込み、それを具体的に微視的な映像と音響の解析に基づくメディア・テキストの分析から作成される論文と結びつけることを目指して、知見を「蓄積」しつつ、理論を「育成」するハイパーメディア型のデジタル・エンサイクロペディアの制作を進展させている。また、教養学部前期課程の授業「記号論」や、学際情報学府の授業「文化・人間情報学基礎」で使用し、受講生の基礎教育に役立てることで、理論理解力の向上を図っている。

以上が、「知のデジタル・シフト」に対応すべく、石田英敬研究室が取り組んでいる「クリティカル・プラトール」プロジェクトの概要である。この3つの研究協働と認知テクノロジーを

知的基盤として、「新しいクリティーク」へ向けた批判的活動が試みられている。これらの批評モジュールは重層的に構築されており、それぞれが相互に関連している。その展開は、新しいメディア分析の知の創出、IT環境をベースとした人文知の探求を目指すものである。このように、知識創出のためのコラボレーション・システムを構築し、視聴覚アーカイブの組織を背景としたテレビのアーカイブ学を打ち立て、その技術的基盤として映像解析ツールを協働的に使用し、さらに研究者間で理論概念のネットワークを組み立てて、国際的に相互に議論し合う批評空間を立ち上げることによって、「クリティカル・プラトール」では、テレビ記号論や情報記号論の立場からメディア分析の知識の構造化を行うことが視野に入ることになる。次章以降では、その具体的な成果の一部を報告していく。

3. 研究事例1：テレビ分析（視聴覚アーカイブとタイムライン）（西兼志）

本章の研究は、財団法人放送文化基金 平成二〇年度研究助成「『フランス国立視聴覚研究所 (INA)』におけるデジタル・テレビアーカイブの構築・利用についての調査研究」の一環である。

私たちは、情報学環・石田英敬研究室とNHKアーカイブス・NHK放送文化研究所との共同研究にあたって、「テレビのアーカイブ学」をテーマに据え、前者が「共時態的アプローチ」を、後者が「通時態的アプローチ」をとることにした。先述のとおり、対象領域にはドキュメンタリーを設定した。ドキュメンタリーは、現実に生活している人々の生活世界を提示しつつ、社会問題を主題化する契機をもつ

ジャンルであるからだ。

本章では、「夕張」という「コミュニティ（地域社会）」を描いた番組にその対象を絞りつつ、「医療」という極めてテレビ的な題材に焦点を当てた。フーコーの用語でいえば、「地域」は「住民＝人口 (population)」をいかに管理するかという権力の基本問題に関わっており、「医療」は「生政治 (biopolitique)」の「知と権力」の「実践」にほかならない。現代

的な生政治が統括する「福祉国家」の政治、生権力の「統治」の問題系——自己の統治の技術をめぐる物語——が具体的に現れるテーマを選択したのである。

このようなテーマ設定のもと、本章では、テレビ的な「接触」あるいは「コミュニケーション」の構造の共時態的研究を行った。以下に続く諸頁では、村上智彦医師を中心として描かれた2006年から2009年にかけての一連のNHKのドキュメンタリー番組の分析を通して、テレビというメディアが「地域医療の物語」をどのように表象しているのか、そしてテレビというメディア自体のあり様がどのようなものかについて

3.1 テレビ番組としての医療

汝エピテルは生命を与えたのだから、体を受け取るように。クーラ [配慮 (*cura*)] は始めて彼を作ったのだから、彼が生きているあいだはクーラが彼を所有するように。しかし、彼の名前をめぐる論争があるのであるから、彼をホモー [人間 (*homo*)] とよべばよい。何となれば彼はフムス [土 (*humus*)] から作られたと思われるからである。

医療とテレビの親和性は高い。そのジャンルがドキュメンタリーであれ、ドラマであれ、その主人公が医師であれ、患者であれ、そこでは、生死を賭金とし、病に向かい合う姿がヒーローとして描き出される。あるいは、情報番組でも、健康問題として頻繁に取り上げられ、さらには、バラエティ番組にもなるほどである。

このように、医療を取り上げる番組はジャンルを越えて存在するが、そのなかでも村上智

彦医師を中心として、2006年から制作された一連のドキュメンタリーは、息の長い取材、多様な視点、さまざまな手法を用いた構成、そして、特定の地域を越え、広く日本社会、その未来に向けた問題提起によって、最も成功したものとして挙げることができるだろう。村上医師自身も、これらの番組をきっかけに、新聞だけでなく、『情熱大陸』『News23』にも取り上げられ、またその試みを語った『村上スキーム——地域医療再生の方程式』（エイチエス、2008年）も刊行されるなど、地域医療の実践者として広く注目を集める存在となっている。

これらの一連の番組は次のようなものである：

- 1) 『ETV特集 ある地域医療の“挫折”——北海道せたな町』（2006年5月20日）
- 2) 『ETV特集 なぜ医師は立ち去るのか——地域医療・崩壊の序曲』（2006年10月7日）

- 3) 『ETV特集 地域医療再生への挑戦——夕張市立総合病院の100日』（2007年5月27日）
- 4) 『NHKスペシャル 地域の医療はよみがえるか——夕張からの報告』（2007年10月1日）
- 5) 『ETV特集 地域の医療を守るのは誰か——夕張・医療再生二年目の課題』（2008年6月1日）
- 6) 『NHKハイビジョン特集 夕張 年老いた町で——医療再生 700日の記録』（2009年2月1日）

タイトルによく表れているように、これらの一連の番組の中心となるのは、「挫折」から「再生」「よみがえ（り）」へと到る物語であ

る。つまり、北海道の瀬棚町における村上医師による地域医療の試みが、市町村合併に伴い「挫折」する。しかし、そのような「崩壊」は一地域にとどまる問題ではなく、村上医師も、「挫折」後の遍歴を経て、夕張で新たに「再生への挑戦」に取り組み、「よみがえ（り）」の徴候が見られるまでになる。ここで、一連の物語は一旦完結する。しかし、物語後も現実は一進一退を繰り返す。「課題」のある「2年目」を迎えた後、「年老いた町」を看取ることになるわけである。

以下では、これらのドキュメンタリーを軸にして、テレビというメディアがその実践をどのように表象しているのか、それと同時に、その表象からはメディアのどのようなあり様が見えてくるのかを考察する。

3.2 『ETV特集 ある地域医療の“挫折”——北海道せたな町』（2006年5月20日）

90分の尺を持つ本作は、オープニングとエンディングを別にして4つのチャプターからなっている。村上医師の進める医療の崩壊を描く第2、第3チャプターをひとつとして考えると、開始30分、60分のところで区切られた3つのパートで構成されている。

その冒頭30分は、彼が実践する医療を概観させ、シリーズの基調を構築するものである。そして、このシークエンスの最後では、その医療が「地域包括ケア」と呼ばれることが紹介される。それは、地域住民に対し、保健・医療・福祉の連携、協力を実現しながら体系的に提供するものだが、「国民健康保険法に基づく保健事業の実施等に関する指針（平成十六年七月三〇日厚生労働省告示第三〇七号）」の次のような定義に基づき、施行されている。

国民健康保険の保険者が運営する診療施設や総合保健施設は、地域における住民のQOLを向上させるため、保健医療の連携及び統合を図る地域包括ケアシステム（地域の保健、医療及び福祉の関係者が連携、協力して、住民のニーズに応じた一体的なサービスを行う仕組みをいう）の拠点としての役割を担うことができるものであることから、これらの施設を運営する保険者においては、当該施設との連携を図った保健事業の実施に努めること。

つまり、高齢化する地域社会、コミュニティを再建しながら、その中で、あるいはその中心として医療を実践するものである。

そして、このケアの中心となるのが、保健師

である。村上医師によれば、「医療と行政の両方に目が届く人たちが保健師」であり、保健師を重視する医療こそが、必ずしも高度先端医療を使うわけではない「医療先進地」である長野や岩手のような地域で行われてきたことだという。それゆえ、「保健師が中心になることが、地域包括ケアの理想の一つ」なのである。

第2作でナビゲート役を務める、医療行政の専門家の伊関友伸氏も同様に、地域医療の崩壊に対処するにあたって、保健師の役割を強調する。地域医療崩壊は、住民や行政とのコミュニケーションの断絶、「『こちら』と『あちら』の溝」によるものであり、この溝を埋めるのが保健師であり、保健所や健康センターで地域住民の疾病予防や健康増進などの公衆衛生活動を行うことで、医師不足などに悩む地域医療現場の負担を軽減しうるのである。

行政は、保健師の活動の重要性について、もっと着目し、保健師のコミュニケーション能力とネットワーク力を活用すべきである。²⁰

保健師のコミュニケーション能力が、医療と住民、行政をつないでいくことで、地域包括ケア、さらには地域社会というコミュニティそのものが実現しうるわけである。

そもそもケアとコミュニケーションは親和性が高い。たとえば、精神科医のドナルド・W・ウィニコットも、ケアをキュアと対比しながら、臨床において重要なのはキュアよりケアであり、それが、「信頼」「交差的同一視」あるいは「転移」という基層的なコミュニケーションの上に築かれると言っている。また、ダニエ

ル・ブーニューも、独自のコミュニケーション学の観点から、このキュアとケアの対が、技術と実践、内容と関係、情報とコミュニケーションといった一般的な対に対応するものであり、後者が前者に優先すると言う²¹。さらに、キュアもケアもともにラテン語の「cura」に由来することを思い出すなら、ケア、そしてコミュニケーションが人間に欠かせないものなのが見え明らかになるだろう²²。

このようなケア＝コミュニケーションが、冒頭の30分で、村上医師を中心とした人々の姿を通して描き出される。まずタイトルに続くシーンで描かれるのは、子供の患者への対応だが、ここでは子供を診察する際には、おびえさせないように、白衣を脱ぎ、ケロップのシールのような小道具を使いながら和ませ、医療器具を「アイスの棒」だと言うことで抵抗感をなくすなど、さまざまな工夫をする様子が示される。また、それに続く高齢者の診察では、病歴、生活歴を知った上で治療をすることの重要性が強調され、「『どう調子?』という一言にさまざまな意味が含まれている」と言う。

また、村上医師は瀬棚診療所に赴任するにあたり、看護師や薬剤師といったコメディカルの充実を条件にしたと言うが、彼らの仕事ぶりで示されるのも、コミュニケーションの円滑さである。たとえば、古田薬剤師は、患者だけでなく、医師とも円滑なコミュニケーションを実践している。伊藤放射線技師によれば、医師に対して意見をとても言えないような従来の風潮とは大きく異なり、瀬棚診療所では、むしろそれが求められており、「以前働いていた病

院とあまりに雰囲気が違うことに驚いた」と言う。このように、瀬棚診療所では、「スタッフ全員が医師と対等な立場で発言することが求められ」、医師、医療スタッフの不足に悩んでいる、多くの地域医療のケースとは異なった量的、質的充実が実現していることが描き出されている。

そして、この村上医師を中心としたコミュニケーションは、病院内にとどまらず、病院外にも広がっている。

たとえば、地域医療を専門とする吉岡医師、そして、一年間の予定で研修をしている富山医師が瀬棚にやってきたのも、村上医師の講演を聴いてのことだった。

また、村上医師は、地域住民の健康意識を高めるために「健康講話会」を行っており、多いときには、年30回開催された。そこで、村上医師は分かりやすい比喻を使い、笑いをとりながら、健康維持の重要性を語っている。このように、病院を出て、地域住民との直接的なコミュニケーションを日常的に取る、ケアの活動を実践している。そうすることで、「ドクター・ショッピング」のような現象を防ぎ、「調整役」として、各々で治療活動を行う専門医たちのあいだでもコミュニケーションを実現しているのである。

さらに、このような地域包括ケアを実現するには、行政とも円滑なコミュニケーションを打ち立てる必要がある。平田元瀬棚町長は、自治体の医療として行うべき地域包括医療に「村上先生を先頭にして、行政と町民が一つになって取り組んできた」と証言する。

このように、冒頭30分では、医師と患者、

コメディカル、住民、行政のあいだのコミュニケーションの円滑さ、そして、その中心たる村上医師のコミュニケーター、あるいはコミュニケーション＝コミュニティの「活性者（animateur）」としての実践が描き出される。

続く30分では、こうして確立されつつあったケアの実践が市町村合併によってどのように崩壊していったかが語られる。そして、その原因となるのも、コミュニケーション不全にはかならない。

新しく就任した高橋町長は、村上医師が瀬棚町で進めてきた予防医療・在宅医療に対して、北檜山国保病院を中心とした医療政策を提唱する。村上医師にとって、このような政策は中味の議論、質の議論のない、病院の規模、ベッド数といった数の論理だけのものである。それに対して、高橋市長によれば、このような村上医師の異議申し立ては、つまるところ、人事、政治・選挙の問題にすぎないとされる。

このやり取りを構成するシークエンスは、村上医師と高橋市長を交互に映し出すことで、擬似的な対話として提示される。しかし、それは冒頭の第1部における円滑なコミュニケーションに対して、「意見書」を媒介とした、「聞く耳持たずの対話」にすぎず、そのコミュニケーション不全を際立たせるばかりのものである。そして、このコミュニケーション不全が、村上医師の「辞表」の提出に帰結する。これをきっかけに、吉岡医師、古田薬剤師、看護師の半数も辞職を決意し、瀬棚町の医療の崩壊が決定的になる。第2部の後半では、この村上医師と高橋町長の対立が、第1部で描かれた、村上医師

を中心としたコミュニケーションによって確立したコミュニティにまで波及するさまが映しだされる。住民集会での、市長と住民の埋めがたい溝は、その端的な表れである。

第3部ではまず、村上医師と同様、母親に聴診器をつけてみせるなど、診療の際の工夫を行う研修医、富岡医師の姿が描かれる。それに続いて、一部の予防医療の継続は認めるものの、研修医の受け入れを財政難のために拒否する高橋市長と、吉岡医師、富岡医師との見解の対立が、第2部における、村上医師との対立と同様に描かれる。こうして再確認される医療現場と

行政のコミュニケーション不全に対して、瀬棚を去って行く村上医師について改めて確認されるのが、彼のコミュニケーションの活性者としての姿である。荷物を整理する際にも、子供の患者のために用意したシールや、「へー」ボタンが取り上げられ、診療所を出るときも、多くの住民たちのひとりひとりと言葉を交わしながら、見送られていく。こうして、コミュニティを築き上げるのに成功したコミュニケーションが最後に示されるのである。そして、それが、新しい赴任先の新潟県湯沢町でも継続されて行くだろうことを示唆しながら、番組は閉じられる（図4）。

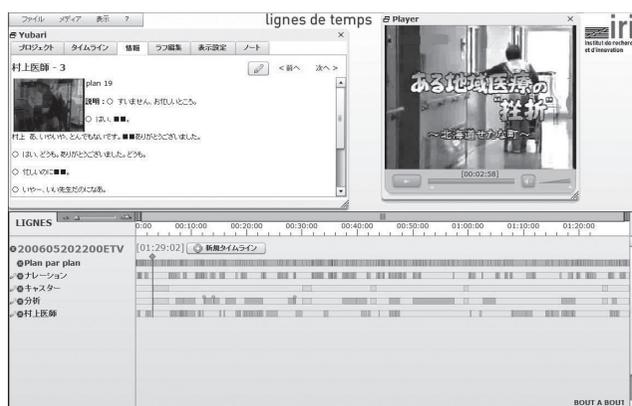


図4 『ETV特集 ある地域医療の“挫折”——北海道せたな町』のタイムライン

3.3 『ETV特集 なぜ医師は立ち去るのか——地域医療・崩壊の序曲』（2006年10月7日）

この第2作目の課題は、第1作目の『挫折』で描かれた地域医療の問題が瀬棚だけにとどまるものではなく、あらゆる地域の問題なのを明らかにすることである。そのために、北海道の夕張市や江別市、京都の舞鶴市、兵庫の養父市が取り上げられ、問題の広がりが明らかにされると同時に、そのような広い観点から村上医師

の実践が捉え返されることになる。

そして、前作では、キャスターの登場が90分にわたる番組を分節していたが、今作では、地域の移動が大きな分節点をなし、そのナビゲートをするのが、行政学者の伊関氏である。実際、彼が登場するのは、これらの分岐点の前後である。

タイトルに先立つ冒頭部は、前作の瀬棚町を

去る村上医師の映像の引用から始まり、同様の問題を抱える江別市を取り上げる。そして、伊関氏が登場し、それらの問題が、医療の現場と行政の対立に起因するという見解が示される。

タイトルに続く本編は、夕張市立総合病院の事実上の破綻、そして、その再建に向けての経営アドバイザーとして、病院に乗り込む伊関氏の姿が映される。そして、開始10分過ぎからの20分あまりでは、前作を引用しながら、同様のケースとして、瀬棚の問題が描き出される。それに続いては、伊関氏に導かれ、市立舞鶴市民病院も同様の事情なのが示される。そこでは、先端的な地域医療を実践しながらも、常勤の医師がいなくなるという非常事態に陥ったのだった。

こうして、瀬棚、江別、夕張、舞鶴での医療崩壊を描き出すのに、番組の半分にあたる48分あまりが費やされた後、『立ち去り』の山場とも言うべき、村上医師と「倉敷リバーサイド病院」の馬庭医師との対談の場面が訪れる。馬庭医師は、兵庫県養父市大屋町（旧大屋町）の「南谷診療所」に勤務していたが、瀬棚町と同様、市町村合併に伴う、診療所の統廃合によって、地域を去るのを余儀なくされたのだった。それが、『挫折』の放送を見、せたな町の住民が開設した、医療問題を議論するためのホームページにメッセージを送信したのだった。このように、二人の医師の出会いそのものが、番組を介して準備されたのである。そして、二人の対面では、地域に見合った医療を進めていくにあたって、箱物にこだわる行政と対立した結果、医療現場を去った医師同士として、共感に満ちた対話が繰り広げられる。このやり取りは、行政との「聞く耳持たずの対話」とは正反

対に、かみ合いすぎで、もはや対話する必要がないと思われるほどの理想的コミュニケーション状況を実現している。

最後の20分では、高齢社会の縮図、未来図だとされ夕張市の医療体制再建のための、伊関氏らによる講演に続いて、村上医師が去った後の北檜山で、住民有志が伊関氏を招いて開いた住民集会在が描かれる。

そして、エンディングのタイトル後の1分で、夕張市が病院の再建案を先送りすることにしたことと同時に、テロップで、伊関氏の病院再建の要請に対し、村上医師が検討に入ったことが告知される（図5）。

ここで指摘しておかねばならないのは、先の村上医師と馬庭医師の対談だけでなく、村上医師と伊関氏の出会いを組織したのもメディアだということである。村上医師は、良くも悪くもある、メディアの力の大きさを認めながら、次のように証言している。

僕らを夕張に集めたのは、ある意味でマスコミなんです。NHKのETV特集で、僕と伊関先生がお会いしてこうなったんですよ。²³

このように、メディアは、透明な媒体ではなく、積極的なエイジェントとして機能し、それと同時に、村上医師のコミュニケーションの活性者としての能力を発揮する場となる。こうして、村上医師は新たなコミュニケーションの場を持つようになり、そのエイジェント性も新たな次元を獲得する。そして、次作では、このように獲得された村上医師のエイジェント性、メディアのエイジェント性がさらに発揮される。



図5 『ETV特集 なぜ医師は立ち去るのか——地域医療・崩壊の序曲』のタイムライン

3.4 『ETV特集 地域医療再生への挑戦——夕張市立総合病院の100日』（2007年5月27日）

第一作目ではキャスターの登場、第二作目では、場所の移動と伊関氏が番組の大きな分節点を記していた。それが今作では、公設民営化に向けてのカウントダウンが分節点となっている：

- ①～「あと66日」（22分過ぎ）～②～「あと31日」（43分過ぎ）～③～「あと24日」（45分過ぎ）～④～「あと4日」（51分過ぎ）～⑤～「あと3日」（55分過ぎ）～⑥～「あと2日」（56分過ぎ）～⑦～「4月1日 夕張市立診療所開設」（63分過ぎ）～⑧～「4月2日 診察開始」（67分過ぎ）～⑨

本作の基調となるのは、さまざまな人々の、診療所開設が近づくにつれての夕張への結集である。まず、雪の中、ひとりで診療所を訪れる村上医師から始まる。ここでもまた、耳の悪い高齢の患者と何とかコミュニケーションを取りながら治療を行う姿が描かれる。そして、「潰れてよかたって。何かそれ、できそうな気がしています」という希望が口にされると同時に、

その後、大きな問題となる、不必要に広い病院の建物がたどられる。村上医師に続いて、夕張を訪れる姿が示されるのは、伊関氏である。とはいえ、このシーンは前作からの引用だが、いずれにしろ、こうして夕張市立診療所の再建の中心となる二人が夕張に集まることを描き出すことから始まる。そして、22分から43分にかけてのシークエンスでは、病院経営コンサルタントの高橋宏昌氏、人材コンサルタントの福島智子氏、続く45分からのシークエンスでは、瀬棚診療所の同僚だった、放射線技師の伊藤和男氏、看護師長の高丸佳子氏、そして、新しく事務部長に就任する佐藤友規氏らが夕張に集結する。さらに、診療所開設2日前には、瀬棚で薬剤師を務めた後、埼玉の薬科大学に准教授として赴任した古田精一氏が休暇を取って、手伝いに訪れる。このように、診療所の設立準備は、スタッフが集結してくるプロセスにはほかならないわけである。

前作でも、冒頭の10分から20分あまりが第一作目からの引用から成り立っていたが、今

作でも冒頭の10分から「あと66日」と示される22分過ぎまでは、前2作からの引用である。そこでは、夕張市立病院の破綻に至る経緯を検証する伊関氏や、後に夕張に合流する古田薬剤師や伊藤放射線技師らが瀬棚で働く姿が提示される。村上医師とは言えば、健康講話会で住民らに日常の健康管理の重要性を説く姿、彼らに惜しまれながら見送られていく姿が示される。

続いて、「あと66日」（22分過ぎ）から「あと24日」（45分過ぎ）と、そこから「診療所開設」（63分）のそれぞれ約20分間で、前者では、医師募集のためにインターネット上で公開するPRビデオの撮影が行われ、後者では、施設の改装費などをめぐって、夕張市長との「直談判」に乗り込む。これに続いて、高橋氏が単独で北海道庁を訪問し、改装費用、光熱費など85%は補助金と起債でまかない、残り15%は夕張市が負担後、病院が返済していくことが決

定する。これを受け、村上医師と高橋氏は、握手をしながら「行けますね」と、診療所の今後に展望を持てるようになる。これらの夕張市長との直談判、道庁での交渉は、瀬棚での「意見書」を介した、聞く耳持たずの対話と対照をなしている。そして、PRビデオでは、診療所、さらに地域医療そのものの顔として、村上医師のコミュニケーション能力が発揮される。

このようなPRビデオ撮影、行政との交渉の場が重要なのは、前作での馬庭医師との対談に続いて、治療の現場とは別の次元で、村上医師のコミュニケーション行為が遂行されていることである。メディアで取り上げられることを梃子にして、治療の現場でのエイジェント性に加えて、診療所や地域医療の重要性を広くアピールし、行政と渡り合っていくに足るエイジェント性を獲得する姿が提示されているのである（図6）。

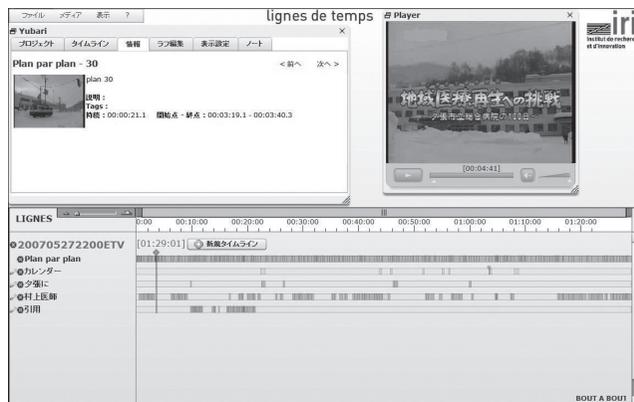


図6 『ETV特集 地域医療再生への挑戦——夕張市立総合病院の100日』のタイムライン

3.5 『NHKスペシャル 地域の医療はよみがえるか——夕張からの報告』（2007年10月1日）

第4作目の本作は、これまでの「ETV特集」の枠ではなく、NHKのドキュメンタリー

の看板と言うべき、「NHKスペシャル」の枠で放送される。それに伴い、番組の時間も、

90分から50分に短くなる。

そして、本作は、ある意味で、これまでの番組のひとつの到達点に位置づけられるものである。

冒頭からの4分の1、13分程度までは、前作からの引用から成り立っており、村上医師が登場する場面（15分29秒）のうちのほぼ半分（7分8秒）がこの部分に収められている。つまり、冒頭部以降では、患者と向き合う治療の場面が極端に少なくなる。これに対して、前景化するのがある患者の回復の姿である。84歳の澤田久雄さんは、前年に肺炎で入院して以降、体力の衰えが著しく、夕張医療センターを訪れた際には車椅子から離れられなくなっていた。実際、そこで映しだされるのも、呆然とするほかなく、医師や看護師らの言葉に反応はするものの、戸惑うばかりの姿である。

しかしながら、村上医師は、肺炎は既に完治していると判断しており、リハビリテーションに力を注ぐことになる。理学療法士による運動機能のリハビリと平行して、コミュニケーション能力のリハビリが行われる。永森医師は、昔の話をする中で、このようなりハビリを試みていた。受け身の、鈍い反応しか示していなかったのが、ある時、同席していたもうひとりの入所者がかつて「樺太」で漁師をしていたという言葉に反応し、突然、「おらも樺太さ行ったぞ、おらも。」という言葉が発する（「それまで聞かれたことに言葉少なに答えるだけだった澤田さんが、突然自分から話しかけた。」）。

そして、ふたりのあいだで会話が続く。おそらく、このシークエンスは、この様子を見た永

森医師が嬉しそうにし、親指を立てる姿にもよく表れているように、これまでの一連の番組の中でも、最も感動的なものであり、さらにこれに続くシーンでも、運動機能の回復とともに、理学療法士とのあいだでもコミュニケーションが回復した姿が描かれる。入所1ヶ月後には（「老人保健施設に入所して1カ月、澤田さんの回復ぶりは目覚ましかった。」）、運動機能として、みずからの足で歩けるようになるだけでなく、ひげも剃れるようになり、コミュニケーションに関しても、歌を歌うまでに回復する。

こうして回復されたのは何か？ 既に病気は直っているのだから、狭義の健康ではない。むしろ、コミュニケーションを回復したのであり、それによって、コミュニティに回帰したのである。そして、この患者の回復の物語に、夕張医療センターが実践する、ケアを中心としたコミュニティの再建の物語が重ね合わせられるわけである——もっとも、これらの回復も再建も当面のものに過ぎず、十全に実現するわけではないが。

そして、この点でこそ、この第4作目がこれまでの一連の番組を完結するものだと言えるのである。というのも、沢田さんの回復していく姿は、第1作目の冒頭30分で提起された地域包括ケアとは、コミュニケーションの実践であり、それによるコミュニティの再建であることを、まさに体現しているからである。こうして、瀬棚町での地域包括ケアの試み、その志半ばでの挫折と、それに続く遍歴、そして、夕張でのその成功というかたちで、物語のサイクルが閉じられ、一旦、完結するわけである（図7）。

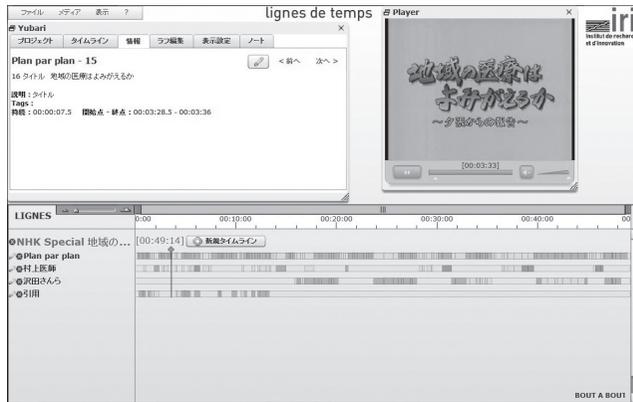


図7 『NHKスペシャル 地域の医療はよみがえるか——夕張からの報告』のタイムライン

3.6 物語の終わり＝スキームの始まり？

このように物語が完結するとともに、村上医師の知名度が確立されるようになる。もちろん「ETV特集」ではなく、「NHKスペシャル」で取り上げられることで、一般的な知名度は高まるが、それだけでなく、この番組に先だっては『情熱大陸』、後には『NEWS23』にも取り上げられる。また、前作放送後から行われたインタビューを取めた『村上スキーム』が5月に出版される。村上医師（たち）が、このような知名度を梃子に確立しようとしているのが、インタビュー本のタイトルともなった「村上スキーム」である²⁴。

このスキームは、村上医師が実践する医療の理想であり、「『村上スキーム』とは、村上医師がいなくなってはじめて完成形態をもつ地域医療・町づくりの設計理念」²⁵である。別言すれば、みずからを犠牲にし、地域に骨を埋めることを前提とし、カリスマ性をまとった「赤ひげ」のような医師ではなく、「普通の医者」が実践できる医療の姿であり、「当たり前のことを普通にやること」で、「神様じゃなくても地

域で医療できる仕組み」である²⁶。夕張市立診療所の永森医師もかつて在籍した、「佐久中央病院」の若月医師のような医師を、ある意味で反面教師にしながら、村上医師自身は次のように言う。

地域医療を支える医師は、神様である必要はない。むしろ、他者が真似できないような神様が登場してしまうと、その人がいなくなったとき、継続していくことが難しくなる。普通の医師が、疲弊しないペースで普通に働いていける環境を作ることが、安定した地域医療を長く続けるポイントだと私は考えている。私は、当センターの医師に、夕張に骨をうずめてほしいとは一切思っていないし、私自身も、ここに骨をうずめる気はない。私がいなくなったあとも、絶えず新しい医師がやって来て、常に同じレベルの医療を住民に提供していく。これが理想である。誰かの犠牲の上で成り立つ医療は、もう終わりにしてもいいのではないか。²⁷

実際、村上医師は、2009年3月には、診療所の所長職を退任（「希望の杜」の理事長は継続）し、夕張を超えて、地域医療を根付かせるべく、活動の幅を広げている。

そして、残りの2作で描き出されるのは、このような「村上スキーム」に沿った地域医療確立の試みである。

3.7 『ETV特集 地域の医療を守るのは誰か——夕張・医療再生二年目の課題』（2008年6月1日）

今作は、次作と同様、これまでのETV特集とは異なり、60分の尺である。そして、前作と同様、冒頭部でこれまで番組を引用しながら、夕張という町、そして、村上医師を中心に行われてきた医療の取り組みが紹介される。ここでは、診療所だけでなく、在宅での医療活動を続けると同時に、行政との折衝をする姿が描き出される。

前作では、このような村上医師の活動に対して、患者の回復が対位的に置かれていたが、今作では、村上医師のもとで働く若い医師の活動がそれにとって代わる。そして、それこそが「村上スキーム」化、すなわち村上医師が去った後も持続可能なケアのシステムが実現した姿である。これは、これまでの4作の観点から言えば、村上医師が、治療者に加えて、行政と

の折衝など、積極的に情報発信を行っていくエージェント性を担うようになったのが、スキーム化することで、彼に代わる、あるいは補完する新たなエージェントの登場が要請されるようになったわけである。

たとえば、永森医師や田谷医師といった若い医師が、村上医師と同じく、在宅医療に取り組む姿が映し出される。また、彼らは、羅臼の住民に招かれて、地域医療のあり方を直接、語りかける。さらに、新しい試みとして、歯科医と歯科衛生士が、在宅患者の高齢者の口腔ケアを行うようになった。

このように、村上医師が治療以外の実践に向かうのに応じて、若い医師たちがこれまで彼が行ってきた医療を積極的に担うようになるのである（図8）。

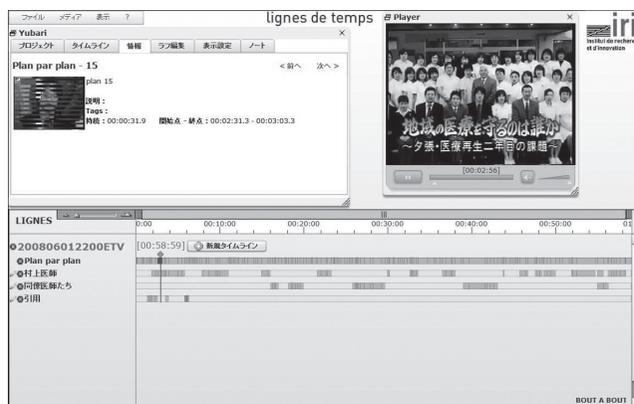


図8 『ETV特集 地域の医療を守るのは誰か——夕張・医療再生二年目の課題』のタイムライン

3.8 『NHKハイビジョン特集 夕張 年老いた町で——医療再生 700日の記録』（2009年2月1日）

「医療再生 700日の記録」と副題を与えられた最後の『夕張 年老いた町』では、前半30分近くがこれまでの番組の引用から構成され、村上医師を中心としてなされてきた「地域包括ケア」の実践がたどり直される。そして、後半部で前景化するの、タイトルが示す通りの「年老いる」こと、あるいは端的に死である。とはいえ、「地域包括ケア」の観点からは、そこで映しだされる死は、決して失敗ではなく、ある意味で、その成功である。というのも、村上医師が「地域医療のバイブル」と認める、斎藤芳雄医師の書物のタイトルが示す通り²⁸、「死に場所づくり」が「地域医療・地域福祉のめざす

もの」にはかならないからである。

僕も夕張には、「死に場所づくり」だと思って来ています。それは地域医療の原点ですよ。²⁹

そして、この番組の最後では、「夕張神社」から降りていく村上医師の後ろ姿が映しだされる。言うまでもなく、これは第2作の冒頭で、夕張を訪れる姿と対称をなすものであり、彼の夕張からの退去、つまり、「村上スキーム」の実現を示唆するものである（図9）。



図9 『NHKハイビジョン特集 夕張 年老いた町で——医療再生 700日の記録』のタイムライン

3.9 まとめ

これまで見てきた一連の番組では、地域包括ケアという、コミュニケーション=コミュニティの再建の試みが中心を占め、その中で、村上医師は、医療の現場からメディアへとコミュニケーション能力を発揮する場を移しながら、活性者としてのエイジェント性を確立してき

た。そしてまた、このようなプロセスで、テレビというメディア自体もエイジェント性を確立してきたのだった。たとえば、村上医師が夕張に来るきっかけを作ったのも、番組の放送だったし、彼の下で働く、田谷医師も「ETV特集」を見て、夕張に来ることにしたのだった³⁰。ま

た、馬庭医師との対談もメディアによって実現したものである。さらに、村上医師によれば、病院内部でも、放送以後、外来の雰囲気がよくなり、患者の態度自体も良い方向に変わったと言う。

このようなメディアのエージェント性獲得のプロセスは、ネオTV化と呼ばれるものである。イタリアの記号学者、ウンベルト・エーコは、テレビが世界の出来事を伝える透明な媒体ではなく、媒体そのもの、あるいは伝達そのものが前景化していくことを、ネオTV化と定式化したのだ³¹。

以前、われわれは、日本の文脈では、このネオTV化のプロセスが、バラエティ番組のメタジャンル化による、ジャンルの混淆とタレントの誕生として行われるのを示した。それに対して、一連の村上医師ものは、むしろフランスの文脈で取り出されたネオTV化のプロセスを踏襲するものである。

現代社会における、個人あるいは個人主義の行方を研究する、社会学者のアラン・エランベルクは、ネオTVを、次の3つの特徴によって、定義している。それは、「個別例の価値」——ある問題を、抽象的にではなく、まさにその当事者を映し出すことで語る——、「誰でも

ない人の英雄化」——テレビに登場するのは、人並み外れた能力を持つからでなく、むしろ誰とも変わるところがないからである——、「関係的サービス」——既存の制度が解決しきれない問題を能動的に解決する——の3つである³²。この観点からすると、「赤ひげ」のような医師ではなく、「普通の医者」が実践できる医療、「当たり前のことを普通にやること」で「神様じゃなくても地域で医療できる仕組み」を実践する村上医師を中心に据え、日本全国に広まっている医療の問題を夕張という辺境の一つの例からあぶり出し、放送を通じて、さまざまな出会いを組織しながら、村上医師の試みを増幅していった、これらの一連の番組は、優れてネオTV的と呼べるものである。

このように、村上医師が、ケアの現場でのコミュニケーションの活性者に加えて、メディアを介してコミュニケーション能力を発揮する、新たなエージェント性の獲得に平行して、透明な媒介ならざるメディアも、現実を構制するものとして、エージェント性を獲得していく。こうして、映しだされるものと、映しだすものの両面でエージェント性を獲得した、メディアの力を梃子にして、「地域包括ケア」は、「全制的施設 (total institution)」の全面化として実現するのである。

4. 研究事例2：理論概念ネットワークの構築（知のコンシェルジュ）（中路武士）

本章では、前章に見たような、実践的メディア分析の知を連結させるとともに、個々の理論概念を構造化し可視化するための知識マネジメントツール「知のコンシェルジュ」を用いた

研究事例について報告する。以下では、メディア研究の理論をどのようにネットワーク化したか、その作業過程を紹介しながら、大学知の再デザインに関して考察を展開する。

4.1 『記号の知／メディアの知』の概念ネットワーク

私たちは、情報学環・石田英敬研究室と日立システムアンドサービス社との研究協働にあたって、「クリティカル・プラトール」の「ナレッジベース」となる「知のコンシェルジュ」のなかに、その第一ステップとして、書籍『記号の知／メディアの知——日常生活批判のためのレッスン』（石田英敬著、東京大学出版会、2003年）を構成する様々な理論概念を実験的に組み込み、その知識のネットワーク化と可視化を試みた。

この『記号の知／メディアの知』は、メディア化した世界を批判的に読解し正確に理解するために、現代日常生活の多様な問題系——「モノ」、「記号」、「意味」、「メディア」、「コミュニケーション」、「時間（いま）」、「空間（ここ）」、「都市」、「欲望」、「身体」、「象徴政治」、「情報」、「テクノロジー」「ヴァーチャル」など——の地図を各章で描き出し、それを扱うための理論の解説を行うとともに、現代思想を基盤とした表象や言説の具体的分析の実践を提示し、記号論的考察を展開するという形式の人文学の書籍である。全体で392ページ、人名索引および事項索引の総数は600以上にのぼる。

知識の構造化のためには、知識と知識の相互関連を発見しなければならない。そのためには、単に概念の定義を記述するだけでなく、関連する諸概念の間の参照関係を定義する必要がある。『記号の知／メディアの知』を構成する概念項目は、一般的な人文学の書籍と同様に、巻末の「索引」において、そのほとんどが50音順に一覧として提示され、それぞれの概念に

掲載ページが記載されているものの、百科事典のようにそれぞれの項目に参照関係が指定されているわけではない。したがって、『記号の知／メディアの知』の知識をネットワーク化し構造化するためには、その諸理論にできるだけ精通し、正確な知識を持っている「人」が、著者に確認を取りながら、ひとつひとつの概念の関係を定義し、その人の「手」で結び付けていく必要がある。

そのため、『記号の知／メディアの知』を構成する諸概念とそのネットワークを抽出する作業は、以下のような手順で為された。

- 1) 担当者が『記号の知／メディアの知』を綿密に読み込む作業を繰り返し、人物や事項の索引を参照しながら概念を抽出すると同時に、書籍内部でその概念と関連する諸概念を多数選出し、ネットワークをヴァーチャルに構築する。
- 2) 日立システムアンドサービス社に提供を受けた入力フォーマット（エクセル形式のファイル）を基盤としたプラットフォームに、担当者が抽出した概念をひとつひとつ「トピック」として書き込む。この際、「人物」と「概念」で「トピックグループ」の分割を行うとともに、「コンテンツ・リンク」として当該概念の掲載ページを書き込む。そして、その概念に関連する諸概念を「関連トピック」として次々と入力していく。
- 3) 日立システムアンドサービス社が、入力済みフォーマットから「知のコンシェルジュ」へと、諸概念とその関連概念を

シェルジュ」に導入した（前掲紀要論文「テレビ分析の〈知恵の樹〉」に抜粋掲載）。

「テレビ記号論の原理」とは、「テレビ分析の〈知恵の樹〉」の「理論マトリクス」の中核となるテレビ記号論の重要概念を纏めたテキスト群であり、「映像の文法」とは、テレビ映像の離散的規則や技法の構造に関する諸概念を纏めた用語解説・語彙集である。書籍である『記号の知／メディアの知』とは異なり、それぞれのテキストは、「知恵の樹」のための「理論」を構成するものとして執筆されており、そこではすでに、デジタル・エンサイクロペディアを構成する「概念項目」とその「内容」が、「理論の最小読解単位」として記述されている。また、それだけでなく、ハイパーテキストとし

て、他の概念項目や図表への「参照リンク」が指定されている。

「知のコンシェルジュ」に組み入れた概念項目の総数は、「テレビ記号論の原理」が約180トピック、「映像の文法」が約150トピックであり、それぞれの関連概念は合計640トピックである。デジタル・エンサイクロペディアの項目とその内容として執筆されたこの二つのテキスト群を導入した利点は、「概念項目」の記述全体をトピックの「概要（内容）」としてすべて書き込むことができること（図11）、そして関連トピックの間の「上位」や「下位」といった「階層」の「構造」を表現することができること、参照リンクの定義と志向性を視覚的に提示できることにある（図12）。

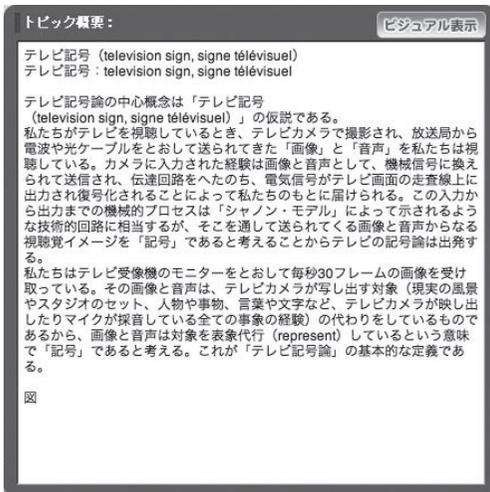


図11 「テレビ記号」トピック概要

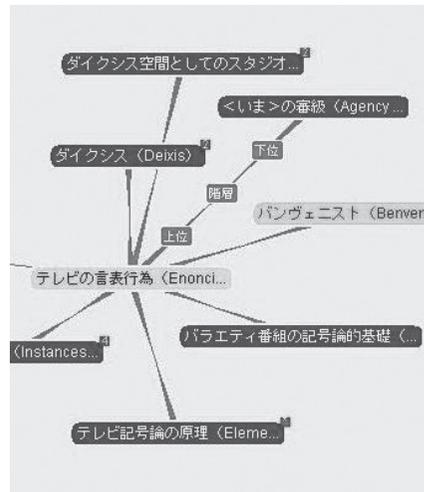


図12 「階層構造」の表現

『記号の知／メディアの知』と同様に、「テレビ記号論の原理」と「映像の文法」の入力作業も同一の方法を採用した。これらの知識の体系は、「知のコンシェルジュ」のなかに書き込

まれ、トピックマップ技術を応用した概念ネットワークの可視化が行われることによって、より明確なかたちで視覚的かつ動的に提示できるようになった（図13）。

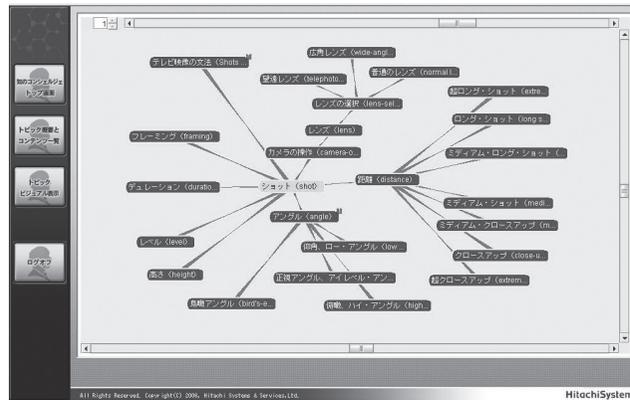


図13 「テレビ記号論の原理」「映像の文法」トピックマップ
(中心トピック：「ショット」)

私たちは、『記号の知／メディアの知』をはじめ、この「テレビ記号論の原理」や「映像の文法」の知識に関しても、認知テクノロジーによる構造化にあたっては、その理論体系に關してできるだけ正確な理解を持つ「人」が、著者と共同しながら、概念の定義と関連付けを行うという研究体制を固持した。そのため、「知のコンシェルジュ」のシステムに「体系化された知識」を導入するためには、少なくない作業時間と労力が必要とされた。

しかしながら、だからこそ、「知のコンシェルジュ」の知識のネットワークは、無数に存在している情報の中で「確かなもの」として体系化され保証されることになると考えられる。それは、Googleなどの検索エンジンや、Wikipediaなどの開放型インターネット百科事典をはじめとした「情報」ではなく、「大学」によって担保された信頼できる「知」であり、そのベースとなる認知テクノロジーは「人間」を媒介にした「確かな知識」のみを対象とした検索を導くシステムなのである。これが知識社会における

公共空間の再定義のために「大学」が構築しなければならない「知」の「環境」の想定すべき「戦略」のひとつにほかならない。

そして、認知テクノロジーを基盤にした大学における知的環境の再構築の提案として、私たちは、この『記号の知／メディアの知』および「テレビ記号論の原理」（「映像の文法」を含む）の概念ネットワークを、コンピュータ・サーバ上に構築実装し、東京大学内のサーバからアクセス可能にした。こうして、研究者の間で、体系化され可視化された知識ネットワークを「共有」するための地盤を整えた。

また、日立システムアンドサービス社の提案によって、『記号の知／メディアの知』と「テレビ記号論の原理」の概念ネットワークの相互リンクが作成され、さらに、それは『情報学事典』（弘文堂）を構成する莫大な数の項目群へと拡大された（図14）。そして、『世界大百科事典』から諸項目を選出したサンプル版「百科事典」が試験的に導入され、これらを重合させた知識ネットワークが組み立てられた。この

5.1 教養学部「記号論」への「知のコンシェルジュ」の導入（中路武士）

1990年代は、大学改革の時代といわれ、大学の知や教育をめぐる環境は大規模な変化を遂げた。東京大学の駒場キャンパスでは、学問の分散化や複雑化、そして学際化を背景にして、「知」をキーワードに抜本的なカリキュラムの改編が行われた。教養学部では、「知」の「基礎」を獲得するための横断的環境の整備が必要とされ、小林康夫・船曳建夫編『知の技法』（1994）や『知の論理』（1995）や『知のモラル』（1996）といった「リベラル・アーツ」の教科書シリーズが出版されるとともに、東京大学教養学部英語教室編『The Universe of English』（1993）や『The Expanding Universe of English』（1994）をはじめとした外国語教育のための新たな教本が登場し、従来の「教育」の在り方を更新するものとしてベストセラーとなった（東京大学出版会）。

「記号論」のような歴史的に見れば比較的新しい学問が大学教育において基礎的なリベラル・アーツ科目となったのも、大学における教養教育の環境の再編成がもたらしたものである。石田英敬は、1993年から教養学部前期課程の大学生を対象に「記号論」の講義を行い、メディア環境の変化に伴う「情報」の量的増大のなかで「確かな知識」を獲得し、現代社会に対する「意味批判力」を養成するための基礎教育に取り組んでいる。2000年代以降は、『記号の知／メディアの知』を教科書として使用するだけでなく、講義内容やシラバスのIT化を推し進め、IT環境を批判的に利用した「基礎知」の獲得へ向けた教育を実施している。そして、この延長上で、認知テクノロジーを用いた

基礎教育の拡充を目的にして、「知のコンシェルジュ」の活用を実験的に試みている。

具体的に2007年に行われた「記号論」への「知のコンシェルジュ」の適用事例について見てみよう。

この講義は、教科書やその関連論文の読解と解説を中心にして進められる。

教員は、講義を進めるなかで、重要な概念の解説にあたって、必要に応じて「知のコンシェルジュ」を動作させ、すでに東京大学のコンピュータ・サーバに構築実装してある『記号の知／メディアの知』や「テレビ記号論の原理」にアクセスし、その理論体系の中で当該概念を検索する。そして、教科書の掲載ページを指示しながら、可視化された概念ネットワークを見せて、視覚的な説明を行う。

このことによって、たとえば「指標記号」という概念が、1) 「記号論」を提唱した「チャールズ・サンダース・パース」という論理学者の概念であること、2) パースの「記号分類」のなかでは「記号」とその「対象」の関係としては「二次性」の「カテゴリー」に属していること、3) 「指向対象」との接触を指し示す「指示作用」を担っていること、4) 「言語記号」である場合は「指示詞」として機能すること、5) 「写真」などの「図像」の「イメージ」の「痕跡」として読み取れること、6) 「ダイクシス」と総称される「いま」・「ここ」・「私たち」の「シフター」として機能すること、7) 「ニュース」や「バラエティ」など「テレビ」の「ダイクシス空間」の基層となり、「テレビ記号」の「指標性」を生

み出すことなど、可視化された概念ネットワークのトピックを押し上げていきながら、動的に概説することができる（図10を参照のこと）。

受講生は、講義の前に、教科書の読解を行い、自分なりに概念の整理を試みたうえで講義に参加する。講義の間、その整理が正確なものかどうか確認する。そして、講義の後、石田英敬研究室の授業用ウェブサイトから、講義で使用されたスライドをダウンロードし、それを活用して復習を行うことで、講義で得られた知識を確かなものにする。講義スライドに提示されている概念には、それぞれ「知のコンシェルジェ」へのハイパーリンクが指定されており、受講生はそこから概念ネットワークへと移行する。そして、「知のコンシェルジェ」に組み込まれている「体系化された知識」のなかで概念を探索し、その概念に関連づけられた様々な概念へと次々に参照関係のリンクを辿ることによって、『記号の知／メディアの知』や「テレビ記号論の原理」によって描き出される「知の配置」を把握することができる。また、それは、授業時間の制限のために割愛された諸概念の理解にも利用され、そのことによって、講義内容を補完することができるので、基礎知の獲

得をより促すことが可能となる。

従来の講義では、受講生にとっては、自分が整理した概念の相互関係の正確さを自分自身で確認することが困難であるという問題があり、また、教員にとっては、課題としたレポートだけでは、受講生が理解した概念関係の全体像の正確さが分かりづらく、講義内容の理解度を適確に把握することが困難であるという問題があった。しかし、「知のコンシェルジェ」を活用することによって、受講生に正確に整理された概念ネットワークを視覚的に与え、講義内容の可視化が実現される。受講生は、自分の概念整理の正確さを測ることができるとともに、講義範囲の位置づけや講義内容の全体像、諸概念の相互関係を視覚的に捉えることができるようになり、それは理論の読解力や理解度、そして思考力の向上へとつながるものである。

このように、認知テクノロジーを使用することによって、「知」の「基礎」の「獲得」へ向けた、大学の教育環境の再デザインが可能となる。「記号論」講義の実験的な試みは、そのための手掛かりを提示するものであると私たちは考えている。

5.2 学際情報学府「文化・人間情報学基礎」への「知のコンシェルジェ」の導入（谷島貫太）

石田英敬研究室では、教養学部の講義だけでなく、学際情報学府の講義においても「知のコンシェルジェ」を試験的に導入している。この背景には、「東京大学大学院学際情報学府」という教育環境に固有の問題が存在する。学際情報学府では、複数の学問領域の横断が試みられているが、その「学際性」という目標はそれに

伴う不可避のジレンマとして、出発点として前提とすることができる「知の共通の基盤」の「不在」という問題を抱えざるをえないのだ。学際情報学府では、この問題への対策として、2004年、「基礎授業」をコースごとに立ち上げた。私たちが「知のコンシェルジェ」を適用している「文化・人間情報学基礎Ⅱ」はその一

つである。

5.2.1 作業の導入

「文化・人間情報学基礎Ⅱ」では最低限の知的基盤を共有することを目的として、主に記号論、テキスト理論、メディア論、文化理論に関する基礎文献の講読を行ってきた。その授業プロセスは、受講生が課題文献を読み込み、その文献に関して理解した事柄や批判したい論点を、掲示板などを利用しつつ書き込み、各回の担当者がそれらのコメントを纏めたいうえで問題提起として発表し、受講生同士で議論し、教員が講評を行うというスタイルで構成されていた。

私たちは、この授業の中に「知のコンシェルジェ」を導入することで、「知の共通の基盤」の「不在」という事態を埋め合わせる「新たな知の回路」を立ち上げることができるのではな

5.2.2 作業の設定

5.2.2.a 作業の仮説

この試みを行うにあたって、一つの作業仮説を立てた。それは、文献を理解するということは、その文献を構成している概念や知識が形成している妥当なネットワークを頭の中に作り上げることであるという仮説である（図15）。この仮説に基づいて、文献の中から理論概念を抽出し、それらに関連付けていくことで、実際にネットワークを作成してみるということを授業の課題とすることに決定した。

課題文献にはそれぞれ以下のものが選ばれた。

いかと考えた。文献の講読を通して理解した概念やその相互関係をネットワーク化することにより、多様な領域にまたがる諸理論の配置をより妥当なかたちで捉えることができるのではないか——この仮説が今回の試みの出発点である。

この試みを開始するにあたって、日立システムアンドサービス社より「知のコンシェルジェ」の「パーソナル版」の提供を受けた。これは「ローカルPC」上で概念項目のネットワークを構築し、トピックマップによる可視化を可能とする認識のツールである。これを受講生が所有するPCにインストールし、作業環境を整備した。以下では、具体的に、2008年の「知のコンシェルジェ」の導入の成果を分析する。

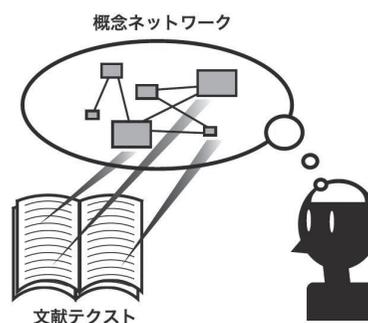


図15 書物から取り出される概念ネットワーク

▶Stuart Hall, “Encoding/decoding”, 1973, reprinted in *Culture, Media, Language*,

Eds. Stuart Hall, Dorothy Hobson, Andrew Lowe and Paul Willis, London: Hutchinson, 1981. (スチュアート・ホール「エンコーディング／デコーディング」)

▶ジョン・R・サール『言語行為——言語哲学への試論』坂本百大・土屋俊訳、勁草書房、

1994年。

▶フェルディナン・ド・ソシュール『ソシュール一般言語学講義——コンスタンタンのノート』影浦峽・田中久美子訳、東京大学出版会、2007年。

5.2.2.b 作業の基盤

この作業では、概念の関連付けに際して、その一つの基盤となる既存の概念ネットワークを設定した。それは、『記号の知／メディアの知』である。この「体系化された知識」のネットワークのデータを、あらかじめ受講生の間で共有した。実際の作業では課題文献から取り出した理論概念を、このハブとなる書籍の概念ネットワークに関連付けていくという作業を基本にした。そのうえで、課題文献の内部での関連付けや、授業で扱った他の文献との関連付けを行った。これは、『記号の知／メディアの知』を構成する概念ネットワークを幹とし、そ

こに関連付けを接木していくことでネットワークを豊富にしていくというプロセスである。

具体的には、受講生による関連付けの仕方は以下の諸パターンに限定した。

- 1) 課題文献内部のトピックと『記号の知／メディアの知』の概念トピックとの関連付け
- 2) 課題文献内部での概念トピックの関連付け
- 3) 課題文献内部のトピックと授業で扱った他の文献の概念トピックとの関連付け
- 4) 課題文献内部のトピックと課題文献内で参照されている他の文献のトピックとの関連付け

5.2.2.c 個々人のネットワークの差異

この試みそのものは前年度から手がけられている。当初、この作業を進めていくにあたっては、集団作業を通して妥当な概念ネットワークを構築していくことが目標として念頭に置かれていた。すなわち、その作業を通して、個々人が自身のネットワークの偏りを自覚していき、最終的には妥当といえる概念ネットワークに辿りつくというプロセスが想定されていた。

しかし実際にできあがった成果を見ていくと、集団として統合されたデータよりもむしろ、個々のメンバーがそれぞれどのようなネッ

トワークを作成したのかというその違いを可視化するデータの方がはるかに興味深いことがわかった。

たとえば、同一のトピックをめぐって、グループのメンバー間でお互いにまったく異なるネットワークが生み出されていた。しかもそこには同時に、そのような差異を生み出した原因であると思われる、それぞれの受講生の知的背景が表現されていた。つまりそのデータには、各受講生がどのような知的背景から概念ネットワークを作成したのかということが如実に現

われていたのだ。そして、受講生は、同一のトピックをめぐって作成されるそれぞれのネットワークの差異の可視化を通して、自身のネットワークの傾向を客観的に把握することができたのである。

5.2.3 概念ネットワークの作成と検討

作業のプロセスは大きく二つの段階に分けられた。第一に、課題文献を決定し、受講生のグループ分けを行ったうえで、個々人が個人作業を進め、自分自身の理解をネットワークとして対象化していった。第二に、その成果が出揃ってから、グループごとにそのメンバーの個人作業の成果を機械的に統合し、グループ全体の理

この成果を踏まえ、以下では、個々のネットワークの差異をより明確に浮かび上がらせるような課題の設定を心がけた。具体的にはネットワーク作成時の自由度をあげることで、個々のネットワークの差異を生じやすくした。

解の配置をネットワーク化した。その際には、各グループのメンバーがそれぞれ作成した概念ネットワークを互いに検討し批判し合い、議論を通して、グループ全体の総意としての概念ネットワークを確定させていくという方法を採用した。このプロセスを通して各自の理解を深めていくことが目指されたのである（図16）。

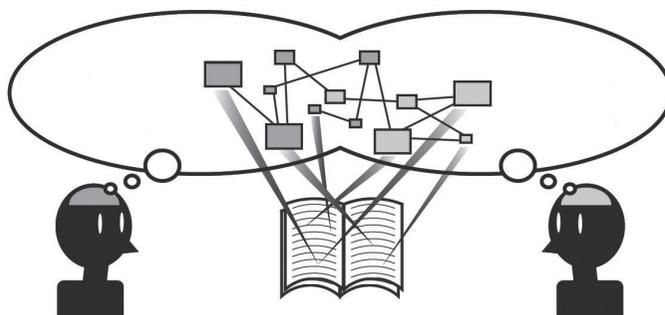


図16 互いの概念ネットワークを検討し合う

このような重ね合わせを行うことで、同一の概念をめぐって、各自がそれぞれに特徴のあるネットワークを作成しているということをお互いに確認し合うことになる。このことによって、妥当な概念ネットワークの模索とともに、そこで生まれる差異についての反省的な意識が生じることになる。すなわち、ほかのメンバー

は何を想定してそのようなネットワークを作成したのか、さらには自分の作成したネットワークの背景にはどのような前提が潜んでいるのかという点について、意識的に振り返る機会がもたらされることになる。

以上のようなプロセスを通して一連の成果が得られた。そして、妥当な概念ネットワークの

グループの受講生の全体的傾向として見出されるのは、情報通信系のメタファーに関してはネットワークが充実しているのに対し、マルクス主義の理論に関してはネットワークが希薄になっているという点である。ただ、受講生Cに関しては、「生産関係」や「流過程」、「相対的自律性」、「形態」といった、マルクス主義固有の概念にもネットワークが伸びている。

その理由は発表会の際に明らかになった。その場で受講生Cは、今回の課題にあたってマルクスの『資本論』を読んだと述べていた。ひとつの論文を読む際に、その背景となっている知識を押さえておくことで理解が深まるという当然の事実が、このケースでは概念のネットワークという形で如実に可視化されているのだといえる。

受講生の間でマルクスの議論の文脈が欠如しているという事実は、上に挙げた例にとどまらず、グループ全体のネットワークからも見て取れる事態であった。この傾向は、かつては基本的な教養の一部であったマルクス主義の批判理論が現在では忘却されつつあるという時代的状況

を指し示しているのかもしれない。受講生Cの事例を踏まえれば、授業中にマルクスの議論を押さえておくというプロセスを踏んでいけば、他の受講生においても同様に理解が深まっていたと思われる。そしてそこで深まった理解は、課題の成果となる概念のネットワークに結実したであろうことは間違いない。

授業の当初、受講生たちの頭のなかには、マルクス主義の文脈という、この文献を読むにあたって必要不可欠な知識が希薄であった。「知のコンシェルジュ」を用いて理解内容を可視化していくことによって、この事実が浮き彫りになった。この結果を概念ネットワークとして具体的に目にすることによって、受講生たちは、自分たちが今後どのように勉強を進めていく必要があるのかを把握することができた。また教員は、今後の授業のなかでどこを強化していけばよいのかを把握することができた。このケースでは、文献を理解する際に必要な知識のうち、何が不足していて何を補う必要があるのかを浮き彫りにするという効果があったといえる。

5.2.3.b ジョン・R・サール『言語行為』

ジョン・R・サールの『言語行為』という文献は、行為としての言語の精密な分類を行うことを目的としているため、厳格に定義された用語を用いて緻密に書かれている。そのためそこでの議論には曖昧さや両義性といったものが入り込む余地が少なく、作成されたネットワークを見ても、それぞれの受講生の間にはそれほど大きな差異が生じていないということが見て取れる。見いだされる差異は、質的な相違というよりもむしろ、ネットワークの量的な濃淡に関係

している。

しかし同時にそこには、そのネットワークの緊密さと深く関係している別の問題点も見出される。それは、文献内部でのネットワークが緊密に構成されている一方で、その内部のネットワークから外の文脈へと接続していくための回路が希薄になっているという問題である。その問題は、「発話行為」というトピックに関して行われた一人の学生による関連付けのうちに端的に現れている(図19)。

5.2.3.c フェルディナン・ド・ソシュール『ソシュール一般言語学講義』

この文献に関しては、まずその出版の経緯について簡単に説明しておく必要がある。記号論の古典として知られているソシュールの『一般言語学講義』は、弟子によって編集されたソシュールの生前の講義が1916年に死後出版されたものだ。その邦訳は、それを底本として小林英夫の訳で1972年に出版された（岩波書店）。しかしその後、原著の元となった講義の検討を通して、この版には数多くの問題が見られることが明らかになった。そして2007年になってようやく、別の未刊行の講義ノートに依拠することで新たな『ソシュール一般言語学講義』が田中久美子と影浦峯によって訳出された（東京大学出版会）。今回の課題で用いたのは、この新しいバージョンである。

この文献を対象として作成されたネットワークを検討することで見てきたのは、このような歴史的経緯によって生まれた二つのバージョンの間の訳語の違いがもたらした混乱であった。むしろそれは、この書物だけに固有のものではなく、翻訳を通して思想にアクセスするという知の環境そのものが生み出す問題である。

授業で受講生が参照したのは、新訳語のバージョンであった。それに対して、今回の関連付けの基盤として設定されている『記号の知／メディアの知』は、新バージョンの出版以前に執筆されたものであるために、旧訳語のバージョンを参照している。そのことによって、翻訳の二つの版のあいだでいくつか重要な訳語選択の相違というものが生じている。作成されたネットワークにはこの訳語選択の相違が強い影響を及ぼしていた。

ひとつ例を挙げてみよう。新訳語では「聴覚イメージ」と訳されている“l'image acoustique”は、ソシュールの議論のなかで中心的な位置を占める概念である。この言葉は、旧訳語では「音響イメージ」とされており、『記号の知／メディアの知』でもその訳語を踏襲している。これは重要な語であるため、当然どの受講生もトピックとして取り上げられており、そこには充実したネットワークが作り上げられている。しかしそこには同時に奇妙な点も見られる。「聴覚イメージ」と「音響イメージ」は同一の概念であるため、一方に関連付けられたトピックは他方にも関連付けられるべきである。しかし、同一の概念を示すこの二つのトピックをめぐっては、それぞれ異なるネットワークが作り上げられているのだ。

たとえば、受講生Hは、「シニフィアン」というトピックに関しては、「聴覚イメージ」にも「音響イメージ」にも関連付けを行っているが、「発話」あるいは「恣意性」というトピックに関しては、「聴覚イメージ」にだけ関連付けを行っている。

また受講生Iは、「言葉の概念」あるいは「言語事象」というトピックに関しては、「聴覚イメージ」にだけ関連付けを行っているが、その一方で、「発声器官」というトピックに関しては「音響イメージ」にだけ関連付けを行っている。

このように、同一の概念を示す二つのトピックが、それぞれ異なるネットワークを形作るという結果になっている（図20）。

アクセスし、文章というリニアな形式で「書くこと」によってそこに新しいものを付け加えてきた。そのプロセスは、文章の読み書きという、リニアな理解形式の絶えざる「内面化」と「外在化」によって構成される「知の回路」というものを作り上げてきた。「教育」もまたその回路のなかに組み込まれてきたことは言うまでもない。

人文知の領域において、文章の読み書きによって形成される「知の回路」が今後もその知の基幹を為し続けていくであろうことは間違いない。しかし現在、人文知は、現実の急速な流動化に対して旧来の知の回路だけでは対応できなくなっている。「知のコンシェルジェ」を用いたこの試みは、伝統的な知を構成してきた読み書きの回路に、ネットワーク型の知識把握という新たな知の回路を挿入し、人文知を再デザインする試みである。

その成果はどうであったか——これまでの検討を通して見えてきたのは、「知のコンシェルジェ」を用いることによって、受講生が概念ネットワークの全体的な関係性をどの程度的確に捉えているかという観点から、その理論理解力を確認できるということである。

従来のレポート形式では厳密な論理展開が要求されるため、複数の知の領域の交差をマクロに捉えるためには、高水準の知識や理解、文章力が要求される。この要求は、一つの授業内では現実的には実行不可能であるため、レポート形式でのアウトプットにおいては、より限定されたミクロな範囲についての理解の正確さに焦点が当たることになる。

それに対して、「知のコンシェルジェ」は、

諸概念の間の関係を厳密に追跡するという点では困難を伴うが、諸概念のマクロな配置の把握という点では大きな長所を備えている。文章化するためには自分自身の理解を明晰に形式化する必要があるのに対し、「知のコンシェルジェ」を用いて概念を結び付けていくという方法では、より直感的な次元での理解を外在化していくことができる。つまり、複数の知の領域の交差関係という明晰な言語化が比較的困難な課題に対して、効率的な表現を与えることができると考えられる。

この効率的な表現のおかげで、受講生たちは、自分自身の理解を支えている知の基盤や知のネットワークがどのように構成されているのかを把握することができ、それを今後の学習の手がかりとすることができる。受講生だけでなく教員もまた授業のなかでどのような要素が欠けているのかを知ることができ、その成果は次回以降の授業のなかで生かされることになるだろう。これまで手探りで進められてきたプロセスが、知識をネットワーク化して可視化する認知テクノロジーによって部分的に客観化され、そのことによって、新たな知の回路を作り上げることが可能になったのだ。

従来、人文知を構築してきたのは、文章の読み書きという営為であった。しかし文章の読み書きは久しく以前から、数多く存在する認知テクノロジーの一つに過ぎなくなっている。それでは、人文知を構成してきた「知」の「生産／再生産」の「回路」に新たな認知テクノロジーを挿入したとき、そこでは何が変わり、何が変わらないのだろうか。そして、何が知を構成する不変数であり、何が入れ替え可能な変数であ

るのだろうか。

もちろん、その答えはすぐに手に入るものではない。今後は具体的な成果を積み重ねていくことが先決だろう。実際、この試みのなかでは目に見える効果が上がっている。そこでは、「理解する」という自明であると思われる事柄が、新たな視角から照らし出されている。この

6. おわりに（石田英敬）

6.1 知へのアプローチ

以上、本稿では、現在、「人間」や「知」や「大学」の「ゆらぎ」が前景化しているなかで、「知のデジタル・シフト」に対応すべく、「認知テクノロジー」を技術的基盤とした「新しいクリティーク」の「可能性」を探求するため、情報学環・石田英敬研究室が取り組んでいる批評プラットフォーム「クリティカル・プラトール」の制作プロジェクトについて報告してきた。

私たちの研究においては、1) NHKアーカイブス・NHK放送文化研究所という視聴覚アーカイブの構築研究組織と連携しながら、2) 映像解析ソフト「タイムライン」（仏ボンビドゥー・センターIRI）を利用したメディア表象の具体的分析を行い、3) その実践知と知識管理ツール「知のコンシェルジュ」（日立システムアンドサービス社）によって体系化・可視化された批判知を結び付けていくことで、新たな人文知、新たな情報知の創出が目指されている。この試みによって、認知テクノロジーを基盤とした「クリティカル・プラトール」が組み立てられ、理論と分析を往還する人文学的研究の再デザインの可能性が技術的に開かれていく。

試みを通して受講生たちは、ネットワーク型の知識把握によって、自分自身の「理解」を新たな仕方であらため直し、そのことによって新たな仕方での「理解」に一歩踏み出している。このプロセスそのものが、ひいては「知」そのものを問い直すための、迂遠ながらも着実な歩みになっていることは間違いない。

また、認知テクノロジーを教育に組み入れていくことで、「記号論」や「文化・人間情報学基礎」のように、大学の教育の環境を再デザインしていくことも可能になる。

この大学における教育環境をめぐる「知」の「問い直し」の問題系は、情報通信技術によって前景化されてきている。そのなかで、現在、「知」に対する二つのアプローチが特にクローズアップされている——それは、「ボトムアップ」か「トップダウン」か、という問題系である。

学生は、GoogleやWikipediaで情報を検索・調査したり、Web掲示板を利用して意見交換したり、あるいはそれぞれがソーシャル・ネットワークを作り出したりすることで、ボトムアップ型の知識を生み出し、知に対するアプローチを構築する。それに対して、「知のコンシェルジュ」などの認知テクノロジーを用いて、大学の教員が担保する「確かな知識」の「体系」というトップダウン型の知へのアプローチがある。

そもそも、コンピュータは、ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニッツの思想によって発

明されたと考えられる。ライブニッツは「微積分」——単に数学の算式ではなく、宇宙の捉え方である——の発明者でもあり、それは微分化していくことと積分化していくことの二つを同時に行える技術あるいは知恵である。その機械的応用がコンピュータなのだ。「ボトムアップ」と「トップダウン」という問題系は、この「微分」と「積分」の問題に直結している。

コンピュータの計算テクノロジーは、人間を感覚や知覚にまで微分化することを可能とし、すべてを数値としてビット化しエントロピー化し、その数量の莫大な蓄積を通してアルゴリズム的な情報の知識のカオスを自然発生的に生み出した。しかし、それに対して、人間の意識とは積分化するものであり、さらに積分化していくとそれは思考になる。カントの表現を借りれば、感性から悟性へ、悟性から理性へと積分化されていくのである。したがって、認知テク

6.2 知の共有へ向けて

このように、認知テクノロジーを活用して大学における研究や教育の環境を編み直す作業は、あらためて「情報とは何か」「知識とは何か」そして「知とは何か」という問いを浮上させる。「資本主義」の「危機」とともに「認知資本主義」が叫ばれるなかで、様々なかたちで「大学」の「知」に関する「問いかけ」があり、また「社会」による「知」に関する「取り組み」がある。それぞれ異なった言語を用いて、異なった知へのアプローチを採っているが、そこには共通項がある。それが「技術」や「環境」への問題意識である。使用される言語の差異はもちろん存在するが、その違いに接す

ロジーを使いこなし、「知性」の積分化を創造的に推し進める「技術」が提示されなければならない。エントロピー的なボトムアップ型の知識に対して、「インテグレーション」によって体系化されたトップダウン型の知識（積分）を私たちが必要とするのはそのためである。「知」とは、相互に関連付けられ一定の規則性をうけた集合的な「記憶」の存在様態であるため、その確かな体系性を保持し、文化の記憶を担保するためには、知のインテグレーションが不可欠なのだ。

したがって、微分化のプロセスと積分化のプロセスをどのように両立させて組み合わせていくのか、その問いを明らかにする技術的環境を大学の教育に組み込んでいくことが、「知」への新しいアプローチの探求につながるだろう。認知テクノロジーの批判的な導入は、その可能性を示唆していると考えられる。

という経験に付き合いながら、「知」への「問い」を「共有」し、お互いに「クリティーク」し合い、知識を交換し公開していくことで、「知」の「インテグレーション」を推し進め、その問いを深めていかなければならない。そして、そのためには、意見を交換して議論の場を開いて、「知の公共性」を「再デザイン」していくことこそが求められる。これからは、情報技術環境を認識のツールと批判のデバイスとすることによって、「ボトムアップ」と「トップダウン」のアプローチを両立させながら、「知」への「問い」を突き合わせ、「知」についての「見取り図」をネットワークとして

可視化し、それぞれの「距離」を測っていくこ ながら、「知の創出」を導いていくのだ。
とが重要である——それが「知の共有」へとつ

註

- 1 Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux: capitalisme et schizophrénie*, Minuit, 1980, p.33. (ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、河出書房新社、1994年、35頁。)
- 2 cf. Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard, 1966. (ミシェル・フーコー『言葉と物』、佐々木明・渡辺一民訳、新潮社、1974年。)
- 3 cf. 石田英敬「Fluctuat nec mergitur」、『東京大学大学院情報学環紀要：情報学研究』第72号、i - iii頁。
- 4 たとえば、「写真 (photography)」は「光 (photo)」の「文字 (graph)」を、「電信 (telegraph)」は「遠隔 (tele)」の「文字 (graph)」を、「映画 (cinematograph)」は「運動 (cine)」の「文字 (graph)」を、「蓄音機 (phonograph)」は「音声 (phono)」の「文字 (graph)」をそれぞれ意味している。このように、様々なメディア技術は、人間が書く文字を経由しない機械による「テクノロジーの文字」として成立している。
- 5 cf. 石田英敬「〈人間の知〉と〈情報の知〉——人間の学としての情報学を求めて」、石田英敬編『知のデジタル・シフト——誰が知を支配するのか?』、弘文堂、2006年、16 - 49頁。
- 6 cf. Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Akademie der Wissenschaften, 1781/1787. (イマニュエル・カント『純粹理性批判』、原佑訳、2005年。)
- 7 1750年代から1770年代にかけて、フランスにおいて、ディドロおよびダランベール監修のもとに刊行された大百科全書 (Encyclopédie) は、啓蒙思想ないし自然科学や産業技術の普及に大きな役割を果たし、その後の百科事典の手本となった。
- 8 純粹理性批判とは、理性が知りうることと知りえないこと、理性における知と無知に関わる批判的思考を意味する。純粹理性とは、経験を可能ならしめる先験的な認識能力、あるいは判断や推論の能力を指す。
- 9 cf. Bernard Stiegler, *De la misère symbolique: 1. L' époque hyperindustrielle*, Galilée, 2004. (ベルナル・スティグレール『象徴の貧困——1. ハイパーインダストリアル時代』、ガブリエル・メランベルジェ+メランベルジェ真紀訳、新評論、2006年。)
- 10 石田英敬・西兼志・高畑一路・阿部卓也・中路武士「テレビ分析の〈知恵の樹〉」、『東京大学大学院情報学環紀要：情報学研究』第70号、3 - 64頁、2006年。
- 11 メディア・テキストとは、映画やテレビなどの視聴覚メディアに現われる意味形成の形態および進展現象である。作品の構造ではなく、分析の実践、読解の作業によって現出する映像や音響の流れ、あるいは形態や色彩の展開などの意味生成の過程そのものを指す。
- 12 共時態とは、記号のシステムの歴史のある一時点における同時の状態を指す。通時態とは、記号のシステムの歴史的变化の推移を時間軸に沿って捉える見方を指す。
- 13 時間対象とは、ここでは、映画やテレビのように、対象そのもののなかに時間性が備わっている人工物を意味する。
- 14 cf. ベルナル・スティグレール「〈愛好者 (アマトラ)〉をめぐって——デジタル・デバイスによる〈クリティカル・スペース〉創出の試み」、石田英敬監修、東京大学情報学環石田研究室訳・解説、『InterCommunication』第62号、N T T出版、2007年10月、48 - 64頁。「タイムライン」の詳細については、仏ポンピドゥー・センターIRIのホームページ (<http://www.iri.centrepompidou.fr/outils/lignes-de-temps/>) [last viewed October 1, 2010] を参照のこと。
- 15 1955年から1959年にかけて、平凡社は、林達夫を編集長として、全31巻の『世界大百科事典』を刊行した。執筆者は4000名に及び、数次にわたって改訂版が刊行された。1970年代、平凡社は、加藤周一を編集長として、編集委員会の数が約120、編集委員が約520名、執筆者7000名以上という、日本百科事典史の金字塔となる全35巻の『世界大百科事典』を出版した。その後、1992年には、平凡社と日立の共同出資によって設立された日立デジタル平凡社により、『世界大百科事典CD-ROM版』が出版され、デジタル百科事典の礎が築かれた。そのデジタル版も、総項目数が約90000、索引語が420000、図版が約4200点という大規模なものであった。
- 16 cf. 三分一信之・藤井泰文「知のコンシェルジュ——百科知識によるコンテンツ探索」、石田英敬編『知のデジタル・シフト——

- 誰が知を支配するのか?』、前掲書、265 - 279頁。
- 17 cf. 内藤求編『セマンティック技術シリーズ：トピックマップ入門』、東京電機大学出版局、2006年。
- 18 吉見俊哉「新博学連環論序説（Ⅰ）——エンサイクロペディアとCMSのあいだで」、『東京大学大学院情報学環紀要：情報学研究』第70号、85 - 86頁。
- 19 桜井均「デジタル・テクノロジーに支援されたテレビ研究——タイムラインとアーカイブの利用可能性について」、『放送研究と調査——NHK放送文化研究所・年報2010 第54集』、2010年。
- 20 伊関友伸『まちの医療がなくなる!?——地域医療の崩壊と再生』、時事通信社、2007年、84頁。
- 21 cf. Daniel Bounoux, *Introduction aux sciences de la communication*, La Découverte, 2001, pp.23-24. (ダニエル・ブーニュー『コミュニケーション学講義——メディアロジーから情報社会へ』、水島久光監訳、西兼志訳、書籍工房早山、2010年、38・40頁。)
- 22 ここで、「cura」という語が、配慮、気遣いと同時に、憂い、不安を意味する両義的なものであるのも指摘しておこう。この後者の意味は、それが無い状態「se-cura」として、安全、安心を意味する「security」という語の語源に残っている。この意味で、安全、安心という憂いのない状態「se-cura」に達するには、「配慮 (cura)」を経ねばならない。つまり、「cura」とは一種の「ファルマコン (pharmakon)」なのだ。
- 23 村上智彦『村上スキーム——地域医療再生の方程式』、エイチエス、2008年、84頁。
- 24 平井愛山・神津仁ほか『医療再生はこの病院・地域に学べ!』(洋泉社新書、2009年)に収められた論文では、「村上スキーム」という言葉を副題に取り込んでいる。
- 25 村上前掲書、262頁。
- 26 平井・神津ほか前掲書、144頁(「自治体、医療破綻からの復活」)。
- 27 村上前掲書、141 - 142頁。
- 28 斎藤芳雄『死に場所づくり——地域医療・地域福祉をめざすもの』、教育史料出版会、1992年。
- 29 村上前掲書、166頁。
- 30 同書、253頁。
- 31 cf. ウンベルト・エーコ「失われた透明性」、西兼志訳、水島久光・西兼志『窓あるいは鏡——ネオTV的日常生活批判』、慶應義塾大学出版会、2008年。
- 32 cf. Alain Ehrenberg, *L'Individu incertain*, Hachette Littérature, 1999.



石田 英敬 (いしだ ひでたか)

1953年生まれ

[最終学歴] パリ第10大学大学院博士課程修了 (人文科学博士)

[専攻領域] 情報記号論、言語態理論、メディア分析

[著書]

『現代思想の教科書』(ちくま学芸文庫)

『知のデジタル・シフト』(編著、弘文堂)

『記号の知／メディアの知』(東京大学出版会)

[所属] 東京大学大学院情報学環 (総合文化研究科)

[ホームページ] <http://www.nulptyx.com>



西 兼志 (にし けんじ)

1972年生まれ

[最終学歴] グルノーブル第3大学大学院博士課程修了 (情報コミュニケーション学博士)

グルノーブル第2大学大学院博士課程修了 (哲学博士)

[専攻領域] コミュニケーション学、メディア研究

[著書・訳書]

『窓あるいは鏡』(共著、慶應義塾大学出版会)

『コミュニケーション学講義』(D・ブーニュー著、訳書、書籍工房早山)

『技術と時間1・2』(B・スティグレル著、訳書、法政大学出版局)

[所属] 東京大学大学院情報学環



中路 武士 (なかじ たけし)

1981年生まれ

[出身大学又は最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 映画・視覚文化論、表象・メディア論

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程



谷島 貫太 (たにしま かんた)

1980年生まれ

[出身大学又は最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

[専攻領域] 現代思想、技術哲学

[所属] 東京大学大学院学際情報学府博士課程